川柳塔

昭和四十九年十二月二十五日　第三種郵便物認可
昭和五十年一月一日発行　（毎月一日発行）
創刊大正十三年　通巻五七二号



新連載「麻生路郎物語」東野大八

川柳ゆーもあ特集

No. 572

一月号

えらばれ
みがきぬかれた 灘の酒
超特撰 日本盛



超特撰（化粧ケース入）
一、八リットル詰・一、八〇〇円

清酒
日本盛
灘 西宮酒造 醸
ニホンサカリ

南海沿線の
初詣



住吉大社
水間観音
高野山

お問合せは
南海国際旅行
南海電鉄
■なんば641-8686
■梅田311-5038■天王寺623-1641

うさぎ

私は中学時代を雪のすくない九州に過ごしたので、兎狩というのは一月末頃、雪が降ろうが降るまいが、耐寒訓練として行われた程度。それも予め放たれた兎を追い込んで一疋か二疋捕えて兎汁のご馳走であるが、下級生までにゆき渡る筈がない。しかも兎汁とは名ばかりで炊事当番が街から買って来た豚の脂肪が大かたの内容であった。それでも正月になると楽しい話題であったのが懐しい記憶である。大学時代、使用ずみの実験用を下宿に持ち帰って友人と食べた事も数回あるが、大して美味とは言えぬし、寧ろ豚汁の方が若い者には数等おいしかった。その昔、徳川家康の祖父松平清康が青年時代、信州に世を忍んで居た頃、新年に兎の吸物を食べてから俄に開運出世したというので徳川幕府代々、兎汁で新年を祝う習慣があったと聞いている。しかし今年の干支の乙卯には兎汁など物騒な事は言わず、従順な兎君と仲よく、安らかな歳でありたいものと思う。



滋賀県水口町大池寺にて生々庵・小石ご夫妻

まわり舞台これは見事な除夜の鐘
素人よりましだと藪医あしらわれ
三か日藪医にうれしい掘炬燵
救急車元日というのが気にかかり

S子さんの再婚を祝す
宿命のきびしさ拝む芽出度い日

中島生々庵

座右の句

一握りああ人生は和にしかず　（路郎）

私の句

積雪の底から春の水の音

浜野奇童

川柳塔一月号目次

題字・中島生々庵・表紙・直原玉青

うさぎ……中島生々庵…（1）
ユーモア……若本多久志…（2）
年頭偶感……中島生々庵…（22）
誹風柳多留廿五篇研究……（四）……（24）
清　博美・八木敬一・紀内恒久・青木迷朗・西原　亮
鈴木　黄・室山三柳・入江　勇・岡田　甫
川柳塔（同人作品）……中島生々庵選…（4）
水煙抄……川村好郎選…（32）
麻生路郎物語……東野大八…（26）
秀句鑑賞…（同人吟）……橘高薫風…（38）
（水煙抄）……西尾　栞…（39）
ユーモアについて……戸田古方…（42）
川柳ゆーもあ特集……同人諸家…（44）
近作……諸家…（29）
百人一首と川柳…（7）……富士野鞍馬…（40）

ユーモア

若本多久志

先日、来日したアメリカ大統領が迎賓館での午餐会の挨拶で、まず日本国民の歓迎に対する謝辞に続いて「私の名前はフォードです。フォードと言えばアメリカには同じ名前の自動車もありますが、私は到底、リンカーンのように立派なものではありません…」云々と、大衆車のフォードと超高級車のリンカーンにかけて、アメリカ十六代大統領リンカーンを引っぱり出して、ユーモラスに自分との比較をした話しぶりには、思わず微笑を誘われたが、実に心憎いばかりの上品なユーモアを交えたスピーチだったと思う。

これに比べて、日本の国民は、おえら方？から庶民に到るまで、挨拶というもの（会話を含めて）はすべて、チャンきまりにやらねば失礼だという錯覚か、先入主になっているのか、無味乾燥でユーモアのかけらもないのは、どうしたことであろう。

ある人はこれを国民性だと説くが、私は決してそうではないと思う。それは近代日本人の日常生活の中や職場で「笑い」というものが、緊張に対する弛緩＝即不まじめという形

生駒便り……麻生葭乃…(30)
川柳セイタカ・アワダチ草……菊沢小松園…(50)
一分間の柳論……岡崎祥月…(43)
待望ノ日本川柳協会生まれる……高杉晃遊…(50)
大阪文化祭川柳大会……有信新之助…(51)
雅号ぶっちゃけばなし……吉岡遥児…(57)
初歩教室……本田恵二朗…(56)
大萬川柳「締める」……川村好郎選…(58)
柳界展望……(62)
本社十二月句会……(庸佑・整理)…(64)
各地柳壇(佳句地10選)……板垣草丘…(77)
一路集「兎」……河内天笑選…(54)
「寒行」……直原七面山選…(54)
「国旗」……伊藤茶仏選…(55)
編集後記……(一三夫・葉子)…(79)

座右の句
二階を降りてどこへ行く身ぞ　(路郎)

私の句
祈るとき人間やナと思う

神谷凡九郎

でとらえられ、その笑いをかもし出すユーモアとは軽薄なもの、下品なものという観念が、戦後の急激な経済成長期で養われたものであって、二百年前の江戸小噺や、狂歌、川柳の中には、実に優雅でほほえましいユーモアを感じる作品も多く見かけるし、庶民もこれによって、ほのぼのとした楽しみを味わっていたのではないかと思われるのである。

では、ユーモアとは何か、と広辞苑を繰ってみると〝しゃれ、おかしみ、諧謔〟となっているが、筆者の感覚ではこの訳語にいささか不満がある、すなわち、しゃれはジョークに通じるし、諧謔はアイロニーに通じ、おかしみはウイットにも通じるように思う。

あえて説明すれば、これらの言葉を混ぜ合せた、上品で優雅で、ほのかに素朴な笑いを誘う表現とでも言うべきで、あくまでも人間対人間のコミニケーションに潤活油として役立つものでなければならないと思う。

よく、どぎついしゃれをとばして、相手の感情をそこね「今のは冗談、冗談！」などと言訳をするようなユーモアは下の下である。又、ふた言目には、婦人の前で言えないようなしゃれをとばす人もいるが、これ等も似非ユーモリストと言うべきだろう。

古川柳に
　串という字蒲焼と無筆読み
　凸凹という字無筆も感じ入り
というのがあるが、昔の川柳作家は鋭い目で、ユーモアを捕えていると思う。

川柳塔

中島生々庵選

和歌山市　野村太茂津

あたり年五度目を迎う初日の出
愛の鞭素振りしてみる策も湧き
大らかに育て闘志はむきださず
子に甘え子のプライドも丸く持ち
胸張って歩こうまちまちの歩巾でも

堺市　河股緑水

淋しくて妻の位牌へ恨み言
醤るまで柿の甘さを信じ切り
心まで写る鏡にハツとする
美しい噂の女の遠会釈
倖せに甘える声になってきた

松江市　柳楽鶴丸

目を閉じれば妻ではない女
友情の犠打憎らしい演出
愛情が今日は本当にこわかった
ジーパンのペアで楽しいサイクリング
汗と涙で書けばドラマになるのかな

神戸市　小浜牧人

スカウトの賭けで卵を温める
恋人が出来たを花屋知っている
山頂へ男は自信取りにゆく
ふぐ鍋を囲んでからの仲となり
割り切れぬ答ばかりで秋が逝く

岡山県　浜野奇童

母の顔アップに写して叱られる
秒針が思案へやけな音をたて
決心をすればくすぐる女が居
ご好意をしみじみと抱き風を行く
平凡な年輪となる日記閉ず

岸和田市　高橋操子

何をためらう我家日の丸ひるがえし
ちっぽけな善意でもよし心満つ
手続不用代すとは甘い用語なり
衣裳展琴の音色のふさわしく
マネキンの個性見分けた織と染

渋柿のたった一つも景になり
白足袋の白さも古いもの語り
まったりと井上八千代春を舞い
パンタロンブヨヨブヨヨと歩くなり
懸崖の店にあるうち咲き終り

名古屋市　吉田水車

一市民知性だけでは生きられず
わが個性まだ見つけ得ぬもどかしさ
泥水の底で白紛塗っている
その虹を大事にしろよとはなむける
手作りの味老妻の味である

倉敷市　本田恵二朗

まゆ少し動き馬鹿にはなりきれず
怒ってる方がだんだん涙ぐみ
自転車に当たられそうな懐手
霧はれて山肌迫まる露天風呂
立ち昇る湯気玉川はお湯どころ

尼崎市　黒川紫香

転んでも転んでも妻の影
背のびする背を何気なく子が叩き
秋空の青さに大阪とまどいし
生きている過去を背負うて日が暮れる
銭湯で大胆に脱ぐ娘の乳房

大阪市　児島与呂志

嘘ちよっと馬鹿正直へまぜておき
人情と法を分けたりからめたり
恰幅が社長に済まんことになり
小指ない男へさりげない視線
声高に話せず云わねば僻む耳

西宮市　島居百酒

嘘きらい抜いて妻にもあなどられ
濡れ手に粟小さい理性が許さない
役立って生きているとの自負があり
千年を生き千年の材となり
旅行から帰って晴の日がつづき

大阪市　川口弘生

母一人子一人嘘でかばい合い
誰とでも遊ぶ孤独をもてあまし
素うどんを吹いてわたしの冬とする
インフレの弁当箱になりました
明日を追う足音だからよくひびき

倉敷市　水粉千翁

元日は齢が要らない人もあり
何用で来た酒を飲む用で来た
泥を塗られてもさしたる顔でなし
やもめ爺両手の孫に支えられ
卯年にちなんで
二兎追って二兎を得る奴太い奴

青森市　工藤甲吉

八尾市　高橋夕花

秋のばら今ひとたびの愛もゆる
炎えつきて風のゆくえに添う紅葉
活けられた菊は幾日待ちつづけ
秋深し月も孤独の翳をもつ
倖せを流すに惜しいしまい風呂

大阪市　金井文秋

雑草も嫌われものが幅きかし
子なしには子なしで生きる道さがす
使い捨てされる宿命を持った歌手
ライターも不発がつづく日の焦り
老醜を見せずに落ちる花もあり

大阪市　正本水客

笹原の果つるまで視界さまたげず
鉱山跡しらじらとして風黙す
谷ぜんたいが湯気を噴いてる音といる
打たせ湯に峰の紅葉が溶けてくる
もみじの深さに圧倒されて谷曲る

岡山県　浜田久米雄

元旦の覚悟が屠蘇でぼやけて来
初詣ことしも凡夫出かけたり
粗衣粗食糖尿などは寄せつけず
立腹の一人をみんなして笑い
世の波にまかせあきらめきった日日

宝塚市　傍島静馬

亭主関白老いて女房にたよる日日
はるばると旅に来て聞く標準語
酔眼にネオンが招く宿浴衣
非常階段試しに降りて咎められ
湯上りの娘にむんむんするおとな

竹原市　山内静水

旅仕度妻はパーマに出たっきり
鎖をとかれて罠が待っていた
席蹴ってひとりぼっちを噛みしめる
どす黒い血が吹き出しそうなめぐり合い
三対一あんた男でしょうとおんな

大阪市　山川阿茶

自己造反自己を非自己にする非情
髪染めて官女のようなパンタロン
読書して人のお脳をお借りする
恍惚を過保護がますます助長する
田中さんの今の血圧診てみたし（田中さん退陣）

竹原市　三宅不朽

素晴しい横顔菊を活けバラを活け
病歴の秋ですなあへふと黙り
蒲団のまろさまろしと思う菊も枯れ
洗濯の白さよ癒ゆる日を信じ
これしきの傷大袈裟な京ことば

倉敷市　小野克枝

昨日から今日へ乗り継ぐ鈍行車

本当の顔を作って逢いに行く
笑わない男の太い眉を見た
「恍惚の人」を姑さん読み始め
記念日を忘れ他愛の無い夫婦

笠岡市　木山遠二

老妻と並んで歩く宮詣り
石段の横に径あり歩きよし

わが金婚

よく随いて来た妻疲れたとも云わず
五十八年妻おそく寝て早く起き
ホネムーンもせず束の間の五十年

米子市　林瑞枝

夫婦身を寄せ合い異郷の子を守り
生涯をかけた仕事の寝言聞く
胸に来ぬ見合い断わる娘の涙
反抗の無口と知らず話し掛け
足音を聞いてわが家の自動ドア

岡山市　川端柳子

長男の嫁を迎えて（二句）

俥わせの沸き出る小箱贈りたし
足跡に悔なし涙もちょっぴり出
ここに陽差し信じてこぼれ種が生え
善人の反抗　力が入らない
失意の日鏡も嘘がつきたそう

守口市　羽原静歩

極楽も地獄もそこにおめでとう
アーチエリー恋の瞳を射るごとし
労資激突素うどんのびたまま
まひの子のまひは意外に気にしてず
出荷する蜜柑へ浮世の風あたり

島根県　堀江芳子

いま生きているありがたさ陽が沈む
特室さんへ婦長は別な笑顔もち
ひとことを飲めばごくりと音をたて
面会の夫　遠ざかる手を振って
病窓の湯の宿ならと想う景

呉市　槇田英詩

百八つ目の余韻の中をおめでとう
一陽来復今年の暦始動する
午前五時妻の読経が朝を告げ
一郎を叱れば次郎つけあがり
神様仏さまと賭け事の口が過ぎ

大阪市　吉田圭井堂

生一本と信じ切りゃこそ酔えたのさ
三代に仕えたお召とは見えず
金婚へ耐えたは妻かこの俺か
お遍路が続くのどかな年であれ
喜寿近くまだ宿題が山とあり

大阪市　大坂形水

不景気な顔が心斎橋歩く

馬鹿にしたような値札の特選場
じっくりと見れば買うのがないバーゲン
だと云って今の野党でどうだかね
悪材料出尽しきっかけ待つばかり

西宮市　藤村メ女

ドライフラワーに人生のたそがれ思う
ほめことば待ってる孫の七五三
なぜなぜに返事が出来ず孫に負け
忘年会蔭で世話役軽くもめ

倉敷市　藤井春日

年甲斐もなく若僧とわたり合い
若輩の専務またまた勇み足
初舞台師匠ゆずりの舞扇
六十路には日々の課題の荷が重い

大和郡山市　森田カズエ

オブジュのようにじゃが薯芽を伸し
寒行の角を曲った音となり
金借りに来たと知らぬか自動ドア
なにもかも吸いこみそうに紅を塗り

神戸市　仲どんたく

リクリエーション播磨行
鉱毒の歴史の里の水が澄み
松の廊下歩るく形のパンタロン
自画像と見くらべられている個展
長男結婚
誓言を神父に取られ結ばれる

倉敷市　野田素身郎

珍客へ財布の中を確かめる
ワンオンして赤とんぼ見るゆとり
共稼ぎコロッケの好きな子に育て
頼もしい父まだ三合では酔わず

枚方市　宮川珠笑

刈り残る焦りへ月が出てくれる
天気晴朗薬石それぞれ背伸びして
世の苦労独り占めする顔で飲み
セールスが政治嘆いただけで去に

岡山県　竹内翁童

腕の細さよ車いすきしむ音
個性的でんなと軽くあしらわれ
うららかな野原利権のうずを秘め
笑っている人がいるから止められぬ

倉吉市　奥谷弘朗

ちゃんとしたうぬぼれだけは仕舞っとき
好転を信じて心の灯を消さず
整うていてもひらめくものが無い
羽田発ずらりならんだ時の顔

鳥取市　両川洋々

働ける首を合理化切って捨て
妻病んで家中慣れぬ音を立て
思い切り泣けとばかりに陽が沈み

男三十砂丘の砂にあなどられ（砂丘にて）
東大阪市　落合思月

真白な足袋も和服の好きな母
妻に惚れ仕事にほれたマイホーム
鍵かけた女の城に福寿草
だまされた過去あり殻にとじこもり
橿原市　岩井本蔭棒

ダンプカー婦交の笛は鼻で聞き
PCBどうのこうのと喜寿迎え
終点の一駅前でタバコ出し
満員車五尺二寸で埋ってる
八尾市　大路美幸

背信の文字読み返す寒い秋
もう灯かぬ蛍光灯で捨てられる
子と妻の他に自慢のない男
みず入らずゆめ語り合うきょうの初春
大阪市　黒田真砂

素顔別に女過去を話さない
枯葉数枚枝に残って居る執念
女心に鍵かけた儘寡婦の顔
全力で生きて空しい寡婦の春
高槻市　福田丁路

借金を笑顔で返す事が出来
丁重に国鉄さんがストを詫び
品質の良さが自慢の子沢山

昭和五十年新春
御指名で新春を寿ぐ下手な唄
大阪市　西出一栄

アスファルトいちょうの落葉刺しゅうめく
秋深み野山をろうけつ染めにする
秋深く徒食淋しい妻楊枝
クラス会米寿の恩師を囲む古稀
松江市　中川晃男

有難く宿坊儲けをはじき出し
しとやかに蔭口をきくお茶どころ
進呈の粗品を貰いに来る晴着
つまずいた石が初心に引き戻し
泉佐野市　阿万万的

花重くなってか日まわり日に向かず
話術たくみにああこの寺も観光地
久し振り会うて聞く事忘れて来
インスタント通です自炊三年目
愛媛県　渡辺暁童

雨でなく落葉でもなく夜の音
動かざること泰山の置きこたつ
雨たしかめて　のむ肚をきめ
山茶花に気を　取り直す冬
岡山県　嘉数千代香

荒れた手へせめて手袋白くはく
ファイトと云う美名の影にいる野心

利口者ばかりで話がまとまらず
またもとの二人になっていく旅路

藤井寺市　西　いわを

三界に家なき女　のさばって
退職金バーにも払う借りがあり
留守番で寂しうなって来た少女
冬籠り蟻いつの間か消え去りぬ

京都市　松川杜的

どの顔に上げよか賽銭ちと迷い（石峰寺五百羅漢）
石仏のおつむが好きか赤トンボ（鵜川四十八体石仏）
石仏の鼻のとがりにある歴史
風ひょいと滝の調を変えてゆく（音羽の滝）

大阪市　神谷凡九郎

裸にして見ても人間でしかない
空涙ためて女は城に住む
買わない買えないことになりました
格差をつけるああ人間智笑おうか

泉大津市　村上春巳

思う程飲めぬを案じ三カ日
目が会うて花盗人に会釈され
参道を傷病兵と鹿がいて
大仏殿朝霜を踏む僧と鹿

東大阪市　久米奈良子

時折は接点もあり長電話
アルバイト僧に灰皿所望され
煉瓦塀工夫の心積み上げる
プレゼント野の花もあり書道塾

愛媛県　村上旭童

値の方はどうあろうとも蜜柑熟れ
病気にはなれぬ予算をたてて哭れ
いつ使う金か七十まだ稼ぎ
ちょっぴりと飲む晩酌と見てくれず

兵庫県　河原みのる

老夫婦互の財布覗かない
齢順に逝くもんかいと力んでみ
小包の好意ゆっくり解くべかり
ここまでの道を蛇口の水に訊く

守口市　野呂右近

年輪の差を近づける話合い
正座して明治女は縫いつづけ
彩づいた木の葉が水も秋にする
向き合った紙の白さに書けぬ嘘

堺市　高橋千万子

計かくに足跡かなしかたつむり
人生のなかばで迷わす人に逢い
風船をパンパンパンと割りたい日
隣席は夫婦やろうか無表情

出雲市　原　独仙

ヴァイオリン孫から借りて枯れすすき
ふるさとの秋分け合ってよい隣保

それからは喋るでないぞと顔で芸
婚約中指も触れないのが不安

柳井市　弘津柳慶

これからは妻のテレビ先に寝る
栗に柿に郷愁泌々と
兄ちゃん早よ貰いなよと弟も年頃
流行はどうあろうとも作業服

大阪市　本多柳志

着流しで来て氏神の秋まつり
炎ゆるもの持たぬ女の厚化粧
誤解まだ解けないらしい怒り肩

旅中吟

弘法のわらじの跡の排気ガス

松江市　吉岡遙児

用あれば休む居職を羨やまれ
ちっぽけな投資くじ買う列に伍し
金脈を探られる立場うらやまし
手打そばなるほど湯気の辺に音

大阪市　江城修史

着飾って心冷たき饒舌よ
居職の灯ノルマが暇を与えない
夢を見る明日へ今日の灯り消す
妻いつも暮しを賭けて身構える

東大阪市　竹中肖二

先生が持てば素直な筆の先
お払いのめし粒撒いて呼ぶ雀
天井の低いマンション族となる
貫禄をつける札びら切ろうかな

兵庫県　小西無鬼

フット今日思い出のタイ締めてみる

無縁塔建立

遥かなる遥かなる無縁塔の観世音
貫禄はデンと座って動かない
こんなファイトあったんだと思うテープ

島根県　蔦井明朗

出世もほどほど足許をすくわれる
負けぬ気が図書館で智恵つけて来る
物価鎮め給えとかしこみ申す初詣
新春は老妻と旅のプラン樹て

大阪市　市場没食子

幸せは老人会の世話も出来
先生にまかせておけず塾へやり
風邪気味の咽喉を通った卵酒

竹荘君病篤し

長患い元気づけては見たものの

大阪市　天正千梢

うしろから眺める余裕いただいて
己が罪知ればはえをもたたきかね
咲き盛る菊へ夫の血がまじり
「我」の力み少し下火になりかかり

高槻市　若柳潮花

舞い扇没我の汗の美しく
さし木した椿が蕾もちあげる
　保津川下り
激流へ孫六岩をすり抜ける
水しぶき小鮎の滝で声をのみ
　讃岐路にて（二句）
海越えて夏が戻った陽を浴びる
バスの揺れ此処の風情は瀬戸が見え
　江の島にて（一句）
空青き日和つづきを旅にいる
六十を若いと惜しむ死亡欄

遺句

鳥取市　河村日満

倖せの限界点と云う悩み
待たしてるつもりで来たに待ち呆け
確かめる愛へ男の慌てよう
親切の押売寡婦は身構える

門真市　福島鉄児

鍵かけて扉の向うは朝にする
箒竹にべたほめされた余生なり
ようやくと今年の喜劇も終りそう
切花の固き蕾が痛々し

富田林市　岩田美代

一ひく一はゼロというさわやかさ
音楽をバックに嘘は琥珀いろ
片想いお好み焼はちゃんと食べ
とれとれの魚と逢いに北の旅

堺市　河内天笑

一生の大事を事務的なりホテル
明治大正もう花の咲く場所がない
自動巻きお前も死ぬまで働くか
バカか利口かそのまんなかのない中年

大阪市　阪上十止庵

着こなしの良さも悪さも齢にされ
遅れまい虚栄不慣れなクラブ振る
セン抜きも帯から出ると高くつき
　香港へ旅して
従軍でない香港の夜は楽し

新宮市　大矢十郎

退庁へ喫わぬ灰皿片付ける
論法を課長一対三で受け
集金の鞄へお犬様が吠え
裏側の景色も賞でて天守閣

松江市　恒松町紅

襟元が蚊に喰われようと襟の脚
たった十七字の恋文かな
新涼や三百に近い師の句集
人間は太陽の力だけで生き

伊丹市　小川静観堂

守口市　村田瓢太

期待はずれだった隣の指定席
ドック入り応急修理の個所見つけ
目立つ前に挙式急いだ披露宴
コマーシャルに惚れこむ程の味でなし

豊中市　戸田古方

遊山には行かないけれど秋の色
転業を問いつめられて喋り出し
執念のどこやらちょっぴり種族維持
本当にオレのいのちも十年か

米子市　八木千代

有料ホーム老女のひとり陶器めく
芸つきた舞台に残る持ち時間
小さな鈴鳴らし続けて女坂
孫と住む日々脱殻となって寝る

岡山県　直原七面山

仝て絵になる足摺岬
旅人が旅人に聞く死の名所
月見草夢二の頃の色で咲き
八つ当りする女房でよく稼ぎ

倉敷市　小幡里風

夢捨てて女が迷う交差点
きっちりと蝶タイ噂のある男
先生も立読みしてる土曜市
胸板の厚みに委せる事があり

八尾市　宮西弥生

甘え知る女に邪魔な防波堤
よいほうにとって寝息乱れない
中年の誤算小さく小さく生き
生活のかかる早出は大地蹴る

東京都　山根白星

嫁がうらやまれ　姑がうらやまれ
あんまりなことを言われた女中部屋
水ごくり飲んで勇気のようなもの
名人の奇行に困る取材班

鳥取県　清水一保

山の端へ沈む夕陽を追う未練
相和した歯車今日はかみ合わず
毎日の闘い菊は知らず咲き
農薬に勝ったバッタを激励し

富田林市　板尾岳人

御来迎山の男に背を向けず
御来迎樹氷へ光り貸してやり
御来迎母に見せたい山は冷え
母の瞳に写して上げよう御来迎

大阪市　室谷徹舟

定年を報告しに来た初詣で
床の間に定年祝う鏡餅
機械化になって改札味気ない
陛下より先に新米食べてはる

倉敷市　稲田豊作

底辺で汗する良人の足を揉み
時点だのイメージだの言う膠噛じり
忘れまいと思うたことさえ早や忘れ
秀吟を読んだとひょっこり訪ねられ

生駒市　草深酔升

値あがりへ破れかぶれの日が続き
靴底のチビも気になる物価高
まだ欲が有るからこその寺まいり
孫抱いた妻と自慢の菊を撮り

三重県　川上大輪

嘘つなぎ合わせ女の生きる知恵
ガムを噛んで少年大人の嘘に慣れ
勲章はないが男の汗光る
かくれんぼ男は鬼になりたがり

呉市　林野甦光

お膳立してあるダルマそれっきり
土壌場に来たので拝まねばならず
閑人が他人の儲けを逆算す
よちよちが母の視線をもて遊び

奈良市　宮口笛生

化粧した妻も一と口新春の酒
酒の四季いける口にて有難し
頼られて力仕事は男なり
農繁期らしさもなくて秋終る

今治市　越智一水

胸に手をあてて仏のように寝る
秋悲し髪うすくなり白くなり
考えは赤いが花は白が好き
美しい姿に声をかけそびれ

八尾市　香川酔々

大和路の秋銭箱に柿並べ
氏神をダムへ沈めていく発破
五百羅漢の一人が嘘をついている
年月に無駄は無きもの石の顔

和歌山市　垂井千寿子

若過ぎる遺影へ孫を報告す
御法話を聞く一時の豊かかも
淋しとも身軽と寡婦はうらやませ
急流に逆らうまいと丸くなる

島根県　小砂白汀

水だけで咲く球根にある誇り
炎えたくて炎えたくて曼珠沙華
印刷のような返事に冷やされる
秋の蝶ツートンカラーの恋が好き

島根県　榊原秀子

亡父亡母の光もまじる星満天
損をする人のお世話も趣味のうち
紅葉を一人たのしむそれもよし
ざわめきの街へ久々血がさわぐ

和歌山県　内芝としよ

丹前が似合って嬉し婿の顔
お見合のノーネクタイが気に入られ
旅疲れ我が家のお茶で生きかえり
湯煙りの匂いほのぼの石枕（川湯温泉に旅）

岡山県　出原敬一

ひやかしの財布を口説く小商い
二毛作暦に追われ陽に追われ
信仰をせよと頼りの医者が言う
哺乳瓶で育てる胸のふくよかさ

堺市　伏見茂美

消して書く砂は女の恋をしり
舞扇おきばりやすと京の人
さす手引く手よろめく足は年かいな
犬に無い特技で猫がは入りこみ

松山市　谷のぶお

繕うてすます障子へ冬が来て
唐草の風呂敷一ぱい母が来る
集金に行った食堂でちょうど昼
じゃんけんという決め方もあり楽し

宿毛市　瀬田美知

しらじらと明ければ一筋別の道
一曲をみな唄わせて鐘一つ
ゆずるものゆずって団らんの外におり
風の角鋭くとがる十二月

大阪市　福井多蘭子

看病の箸のさばきを見てかえり
病妻の云いたい事を聞いてやり
病妻と語るわが身も病持ち
粥煮えて味噌小出しする朝寒し

島根県　堀江正朗

妻の炊く粥の恋しさ風邪ひいて
妻の部屋ノックしてから胸を張り
陽なたぼこ雀と対話しています
陽のぬくみ両手に受けて秋惜しむ

平田市　久家代仕男

霧うすれ霧の上なる山紅葉
山峡の日暮れ時雨の中に消え
枝おもく廃家に柿の熟れたまま
値上げ巾ぼやきながらも刷らされる

岸和田市　植山武助

会費だけ次々増えるお人好し
話のわかる親爺になって金が入り
初孫の欠伸も笑った事にする
酒ぐらい飲めと子に酌ぐ下戸の父

岡山県　横山一声

赤ちゃんかと思えば犬を抱いており
まだミニをはいているかと振りむかれ
苦しさに値上げをすれば客が逃げ
育てる事知らず産む事だけ覚え

大阪市　宮尾あいき

つれづれを鏡の顔に紅をさす
日日好日朝寝の床でふと思う
陽を浴びる裸婦像老の目にまぶし（中之島風景）
残菊のあわれに見えて淀屋橋

大阪市　小出智子

たくわえた幸せ何処にも影がない
旅の話に少し弾んでいる夫婦
啼く虫のねぐらは貧し石の下
しばらくは水の流れに負けている

大阪市　河野君子

笑えない満期保険のちゃちなこと
帯しめて炎えるものあり秋ひそか
逆らいたくて終日ガムを噛んでいる
内装のセンス私の趣味に賭け

大阪市　柳原静香

栗林日頃のうっぷん埋めて来る
老父母を誘い出すのも秋日和
待つことに馴れて一日笑わない
地球儀の今どのあたり秋の冷え

貝塚市　野坂つき子

コイン一枚今夜の恋を賭けてみる
焦るではないとウインクするダルマ
世渡りのうまい男の艶をみる
お喋りな女がある日黙りこむ

竹原市　小島蘭幸

無欲とはどえらいことをやってのけ
疑えばみなそのような顔をして
ロングドレスが流行り日本冬になる
スポットライト浴びて男の生きざまは

竹原市　森井菁居

決心へ荒野キリリと冬の貌
さざんかよ咲けせめてもの冬の詩
喪が明けてからをひしひし秋の冷え
秋の見おさめ痛んだ菊で良い

東大阪市　竹中綾女

真珠貝真珠作って殺される
伊勢に来て真珠のタイピン夫へ撰る
隣りから読まれ新聞畳み兼ね
旅慣れた友は土産など買わず

仙台市　川村映輝

こつなどは無いが長生きしてしまい
孫の胸に勲章下げて写真撮り
定期券見せれば駅員そっぽ向き

今治市　原田一風

グループが嫁くたび和服着て並び
うっかりと抱いて襁褓を替えさされ
Uターン組で過疎地も秋祭

兵庫県　大江秋月

欠勤が目立ち農繁期の会社
紅葉が散って名所はもとの過疎

落葉焼く煙が寺を朝にする
香川県　岡田拳法

人手なく扱い難い腕も借り
金繰りがついて頭がからになり
後手ばかり続けそれでも倒れない
宇部市　平田実男

総入歯痛まないのがちと淋みし
ただ事じゃないぞと思うイヤリング
夫婦けんか子等の淋みしい目で和解
玉野市　小谷仙山

成るように成ってドラマの幕が下り
其の内に何んとか成ると当てもない
親と言う便利な者の荷が重い
小松市　馬場魚山

巣をかけた蜘蛛にも思惑違いあり
ゆずる事知らぬ貧しい嫁姑
八幡様の祭神知らぬまま氏子
大阪市　今西章雅

任地では左遷と知らぬ支店長
乗り出した膝言い過ぎを気付いてず
こぼれ萩秋のあわれを土に画き
米子市　増田竹馬

羊羹はケチの度合いを知っている
視る角度母は茶の間の指定席
肉体の老化を反骨カバーする
和歌山市　沢山福水

道問えば心に残る京言葉
成せば成る日曜大工汗を拭く
旅衣一期一会の膳の色
諫早市　原田明春

月一つ一つずつくい波頭
末席をけがし手酌でほっとかれ
泣くという手もあり彼女意地を張り
羽曳野市　塩満敏

新米がうまい俺達日本人
勝算があって男は無言です
落ちそうで触れたら女ついと逃げ
宿毛市　山本窓花

ハンターを逃れて庭の迷い鳥
柿の皮干して自慢の白菜漬け
値上りと不況のピンチ屋根が漏り
神戸市　佐々木静泉

背伸びしても大空半分見えるだけ
争うた妻と荒野で対座する
枯れ葉舞う果てに大地が待ちうける
出雲市　尼緑之助

沖縄にて
戦跡は右も左も砂糖キビ
れいめいの塔よ歴史はかくかなし
観光がバックで磨き上げられる

見送りへ目立たぬ顔がのぞいてる　富田林市　和田維久子
家庭円満女が馬鹿な笛をふく
老いらくの派手を好んで秋を着る　松江市　岡崎祥月
二ヶ人の対話炬燵の中のもの
寒風に老人体操手足振る
直線を愛し我が家へペタル踏む　桜井市　岩本雀踊子
御先祖は尻ぼがながい尾骶骨
どこでどう消えるか妻のアルバイト
つながりを残す女が罠をかけ　岸和田市　福浦勝晴
元日の真昼の夢に耽ける豚
文楽の細い煙りで続く芸
極楽に行ける信心すすめられ　神戸市　中村ゆきを
雑用にふくらむカバン持ち歩き
女のような指で長髪かきあげる
貌の無い石仏もいて風の中　大阪市　中川滋雀
無視された立場を守る黙秘権
枯れ枝の斗志は風に逆らわず
感謝状極まり文句で感謝され　岡山県　永宗宗義
倖にする約束に身をゆだね
年の瀬を泳いで帰った折を提げ
友情も計算済みにした師走　大田市　藤田軒太楼
疑心暗鬼もう常人の瞳にあらず
折れる気で行けば居留守使っとる
老兵の余力年金に支えられ　八尾市　古川鶴声
さわやかな秋とは私腹で肥えた人
色付いた柿へチョッカイする烏
社交婦人バイトで稼ぎ身を飾り　兵庫県　遠山可住
冬へ向かう虫も木の葉も逆らわず
足早やに過ぎても男みじめなり
湯加減は良し赤とんぼなにわ節　高槻市　山田季賛
釘の方が素直にならぬヘソ曲り
若返る秘訣を妻は知っている
本心を言うてさっぱり酔いつぶれ　氷見市　関美子
松過ぎて夫のネクタイ日々同じ
おんなの傘に雪が降り積む時が降り積む
夜のフェリー揺れてこころも揺れて闇　大洲市　堀内暁風
いい話寄ってたかって聞きたがり

縄のれん隣りも酔うて話好き
人生の終点までを趣味に生き

大阪市　河井庸佑

考えが有っての処遇と気が付かず
ガキ大将案外素直な面も出し
他人から見れば何でもない仕草

東大阪市　斎藤三十四

還暦が祭囃子の先に立ち
感謝状妻の内助も褒めてくれ
五百羅漢中に一面知ったお顔

鳥取県　鈴木村諷子

ひと掴みという計法もあなどれず
世の信を無にせぬ重荷生きつづけ
バスの窓ひとり一人に風景画

岸和田市　葛城伊三郎

軒貸したたこ焼き店のよう流行り
思い出せぬまま終点へ来てしまい
抜ける物抜けて喜の字も近くなり

美祢市　安平次弘道

「ひかり」山口県を試走（一句）
反対の声轟音で消す「ひかり」
結果良好家中に灯がともり
生きる力生かす努力の手術室（妻手術）

柏原市　大峠可動

夫婦合唱青空が果てしない
風のようにとがり風のようにまるい恋
日本に四季あり雪の薄化粧

大阪市　西川誓二

都会の子へ故郷のきびしい冬を書き
故郷の便りに汗で貯めた銭を入れ
何も知らず生簀を泳ぐ魚の群

松原市　玉置重人

好き好き好き人妻怖いことを言う
チューインガム掃除する人捨てる人
熨斗袋母の意見を聞いてみる

鳥取県　森田布堂

隣からもろうた風邪がまだ抜けず
火葬場に焼き順があり待たされる
マスクした客に銀行ギョッとする

青森県　木村涼人

まあまあですよと税務署意識する
孫抱きに行く臍繰りが少し減り
店番は秋の農夫に羨やまれ

笠岡市　出原真奇

三カ日普段着のままで妻はすみ
最後の最後の味方は妻であり
チビなりに小猫はキット身がまえる（捨て猫）

京都市　都倉求芽

裏側で一息ついだ陽が昇る
木枯らしへアンテナだけがほり出され

結局は嘘言うた奴が勝ち

松江市　小林孤呂二

初老さみし医師の見立てへ素直なり
吹き荒れの季節へ政治も転びそう
女ごころ不安を夫の所為にする

尼崎市　高津徹也

舞い落ちる全てが詩集秋の色
酔いしれた心は秋の夕陽を見ない
オーバーの襟立てるべくあり冬枯れる

大阪市　飛田好一

地味が好き妻の晴着がまぶしすぎ
奴だこ巧くみに妻が糸手操る
彼岸忌に酒も供えて亡父憶う

大阪市　津守柳信

手不足にかくれて浮かす人件費
値上りへ同情しといてこぼす愚痴
信用で世渡り出来る素晴らしさ

貝塚市　行天千代

紅一つ買った事なく年重ね
七五三　三つの孫に重い袖
黄昏る今一瞬の茜色

八尾市　内海幸生

蟹真似た穴が少し狭うなる
読み返す日記に時々嘘を見る
一坪を花園とする夢も蒔く

唐津市　新岡回天子

反省するところあり平家の滅亡
明月を一人拝んで野は広い

大阪市　藤田頂留子

火遊びのむくいと相談欄きびし
目玉品ねらってスーパーハシゴする

和泉市　西岡洛酔

ふる里の空は青だと便り来る
寡婦の今女を捨てて母を生き

岡山県　池田古心

見舞客坊主で偏屈追い返え
我が影と貧乏仏になる日まで

竹原市　時広一路

妻退院次の白羽が僕にたち
演出も手馴れたように山の四季

倉吉市　渡辺菩句

旅に出る孤独の靴をよく磨き
湖の朝しやわせを画にしとく

大阪市　神田秀峰

魂胆が見えてるキザなリボン付け
待ち合せ女は強くすっぽかし

茨木市　吉川米子

飢餓国のニュースにも馴れ食事する
団地の午前パートばやりで無人島

大阪市　鈴木生仏

人間の顔にも春と秋があり
殿様も足で水飲む菊人形

和歌山市　井上マサ子

たぎるものありて夜長をまどろめず
つかの間の夢をかなえた秋の虹

和歌山市　吉野冨江

まな板へ女心を乗せた音
冷凍鯛王者の誇り失なわず

和歌山市　津田与史

美しい指に尖った爪があり
菊の香を猫も嗅いでる日なたぼこ

和歌山市　若宮武雄

山門はせめてまんなか歩き抜け
九輪のさきに動かない空がある

和歌山市　小川佐知子

久しぶり駅で出会って乗りおくれ
ふりむけば女忘れた妻であり

大阪市　不二田一三夫

人情沈没　明治も誇り忘れかけ
春雷は癇癪玉を投げる気の

西尾栞

旨い河豚へ案内します娘婿
活河豚へ鉋丁いよいよ無口なり
酒場の昼　保証人の要る話
伯耆冨士ガラス戸越しに皆生の湯

貫禄はとぼけた返辞するもよし

菊沢小松園

物価高ジッと我慢の子に育て
掌の中だと知らぬ悪あがき
死に際に妻に逝かれた市場かご
知り過ぎて蛹のままで繭を出ず
霊柩車文句の多い人だった

若本多久志

せめて俺だけでも人を信じよう
自慢する何ものも無しわが余生
野の花でよし心ゆたかなり
古傷を水子地蔵に掌を合わせ
頷いてくれた返事に母の味

北川春巣

入院・手術（49・10～49・11）

病人の見えないとこでヒゲが延び
腰巻きを胴に巻いてる胃の術後
付添いのおばはんに検温管理され
お見舞いに傷跡見せるほどなおり
一日一日余生を積み上げん

川村好郎

無理ないとゆるす心がほぐらせる
病院も満員顔見世も満員
尾灯消ゆ遂に相容れざりし人
半径の自由は妻から与えられ
銀行へどの顔で行こう十二月

年頭偶感

中鳥生々庵

明けましてお芽出とうございます。

川柳塔も10年という一旬節を迎えて、一層身のひきしまるおもいがします。本年もどうぞ宜敷お願い致します。ことしは卯の歳というので、あちこちに兎の絵や置物がならべられて賑やかなことです。

兎と亀とが競争すれば、どちらが勝つか。兎には充分自信があった筈なのに、その自信が見事に裏切られた。それは兎に油断があったからだと、教えられて来た。なぜ油断があったのか。兎に自惚れがあったからだと、続いて教えられた。自信と自惚れとはどう違うか。「いんなあとりっぷ」という雑誌が、昨年の新年号で、自信とは何かという特集号を出した。その中で笹沢左保氏は「自信というのは自分の価値や能力を信ずる事。その価値や能力は、世の中の万人が認めてくれることによってわかるものだ。一部の人か或はほんの数人から、あなたは美しいと言われて、自分は美しく、魅力的だと思い込む。それは自信でなくて自惚れというものだ」と言う。

そこで私は考えた。兎が亀より教百倍も早く走れる事は万人の認めるところとすると、

同人吟選者

中島生々庵

西尾栞

若本多久志



うまさをそのままお届けします
アサヒビール

兎は走る点では充分自信があってもおかしくない。その兎が亀に負けた。

笹沢氏の言葉は続く。「十人並みの顔と言われる女の子が、男はすべてわたしに夢中になるはずだと信じ込んでいるのがもの凄く多い。それは最近の女の子って、自己主張が強く自己中心主義であるからである。そんな自信たっぷりでいることを万人に認められるって女の子は、ほんの一握りしか居ないはずだ。つまり大半は自惚れているってわけさ。逆に言えば自己中心で自己主張の強い女の子って、自惚れも強くなるもんだ。この点は男の子も同じだけど。」

こうした笹沢氏の言葉を味わっていると、ことしゃ卯の歳兎のように、長いお耳をふり立てて、踊ってばかりいるわけにはいかぬ人間が、そこら中にいくらでも居るように思えて来る。

旧臘12月1日、日本川柳協会が力強く発足した。親睦と川柳興隆が主な目的であるが、向うのお山の麓まで、互に遠い道の旅、警め合いながら、自信のある歩みを続けたい念願で一ぱいである。

今一度、笹沢氏の言葉を借りて結びとする。「本当に自信のある人、つまり万人からその価値と能力を認められている人ってのは、どちらかと言うと控え目なんだ。決して自己中心じゃない。他人に自己主張を押しつけたりは、しないものだよ」。

社告（川柳塔社）

四月号から「第3の雑詠」を復活します。〝九輪抄〟に代わるもので橘高薫風選になります。2月15日締切・三句以内。（次年度は正本水客選の予定）

送り先　〒560　豊中市中桜塚三丁目一三―一五　橘高薫風宛

水煙抄選者
川村好郎
菊沢小松園
北川春巣

お役だてください
アリナミンA®　タケダ
効能＝肉体疲労時・妊娠授乳期・病中病後のビタミンB_1補給。脚気。神経痛・筋肉痛・腰痛・肩こりの緩和。
☆食後すぐおのみください。☆25ミリ錠。



美博清

誹風柳多留廿五篇研究

青木迷朗・室山三柳・八木敬一
西原亮・入江勇・紀内恒久
鈴木黄・清博美・岡田甫

―(四)―

69 **でゑぶ降すと素壱分がこまって居**

青木―懐中唯一分ぎりで吉原の遊廓に登楼したはいいが、俄の大雨（或は雪）に降り込められて、居続けするにはもはや無一物では困り果てたというのである。新吉原の四囲は田ン甫で、傘が無ければ全身ずぶぬれの濡鼠になってしまう。

降って来やしたに素一分ぞっとする　五三・11

積ったと聞いて素一分消えるやう　三四・13

八木―賛。読みは「降りいす」であろう。雨でも雪でもいいが、雪の方がおもしろい。

紀内―八木氏に賛。雪である。礎稿引用句にあるように、金があれば雪を口実に居続けをするのであるが、まさに素一分あわれむべしである。

岡田―賛。無一文ではカゴにも乗れず……。

70 **小町の手から洛中へかけこまれ**

青木―小町の雨乞を詠んだ句。小町の神泉苑での雨乞の歌は「千早ふる神も見まさば立ちさわぎ、あまのとがはの樋口あけ給へ」といわれるが、川柳では「ことわりや日の本ならば照りもせめさりとてはまた天が下とは」にしている。

小町の歌に感じた竜神が、洛中へ駈け込み雨を降らせた。「かけこまれ」は、また俄にくもって来たので、雨乞の連中が神泉苑から人家のある街中へ、くもの子を散らすが如く駈け出したともとれる。雨乞成功は小町の手柄であるというのである。

口先キで日和くづす美しさ　三・6

さりとては又といふ時かきくもり　拾二・12

小ッぽけな町で名高い雨が降り　天二・智1

室山―賛。「千早ふる……」の歌は『小町集』が原典。「ことわりや……」の歌は『業平餅』が最も古いと思われる。「千早ふる」は江戸時代の随筆にかなり多く引かれているのに、川柳においては、その句面を「ことわりや」の方が独占している感がある。柳界では先句にならう傾向が強いとしても、おもし

ろい現象である。

入江―賛。

歌の徳天の渡川ひらかせる　五三・10
歌の徳天も感涙ながすよふ　五九・37

岡田―同。

71　浅黄羽二重を振たて名が高し

青木―「浅黄羽二重」とは、浅黄裏は野暮侍だが、金箔の付いた浅黄・浅黄羽二重は立派な浅黄裏で、先ず大名や家老格の不粋な者を云うのである。

本句の場合は、仙台伊達綱宗。振ったのはしたがって三浦屋高尾。史実では綱宗の吉原行らしい痕跡はあるが、高尾に馴染んだ事実はないと。

金箔の付いた浅黄を高尾ふり　五〇・9

室山―賛。「高し」に高尾を利かせているのであろう。

入江―賛。

徳をとるより名を取ったは高尾　二四・3

紀内―賛。「浅黄の羽二重」がいかにも面白い。

岡田―同。

72　折鶴にふいとふくれる嫁の顔

青木―『江戸川柳辞典』に「まだういういしい嫁が、幼い子に折紙の鶴を折ってやり、フッとふく。ふくれた顔を見せたことのない嫁のふくれた顔を初めて見たというのだ。美しい句」とある。

子供のために鶴を折ってやった。も勿論よいが、手持無沙汰の一人りぼっちの所在なさ、淋しさをまぎらかすため、何とはなしに鶴を折って居る姿としては如何であろうか。「ふいとふくれる」にあう様に思われるが、鑑賞は各自自由。佳句たる事に異論はない。

愛想に嫁はつるだのお船だの　一七・38
折づるの開眼口でひとつ吹き　四一・36

西原―賛。

折鶴に斗り息の音嫁ハ出し　二五・25
折鶴と羽子の子ニ嫁いきヲ出し　二八・21
草双紙見料に嫁鶴を折　二七・29

室山―同。いい句。

折鶴の五臓へ足らぬ嫁の息　九六・10

岡田―同。

麻生路郎物語（1）

東野大八

まえがき

八十余歳の宝寿を生駒市の寓居に自適されている麻生路郎先生夫人葭乃さんを、一度お訪ねしたいものだと念願してから久しい歳月がたつ。それが思わぬ機会からかなえられ、秋も十月の最中そのデートは成功した。

日時を双方定めあっての十年近い再会であったが、玄関先の出会いはいとも気軽なご近所なみの挨拶ですんだ。このことは月毎の川柳塔誌上のおなじみに加え、日ごろの文通繁き余徳に由来しよう。

葭乃さんから私あての書信は、すべて四百字詰原稿用紙で、現在までに左様いうに二百枚は超えていよう。その文体は情思こまやかで簡潔明快、筆勢流麗、適度の風刺やユーモアもまじえられている。批文のたびにこれが八十余歳の老女の手になるものかと感銘しきりで、もしわれ彼女の適齢におよんだとき、これ程の達意の文筆が保てるであらうかの危惧の念を抱かしめられたことである。

ともあれ、葭乃さんが寄寓先のご当主、令息の麻生アートさん御夫妻へのご挨拶のあと階上の彼女のお部屋へと招じられた。部屋中央にひときわ眼にたつのは、路郎先生の赤銅色の大きな胸像である。そして部屋一方には

―その日暮しも軒に雀がこぼるゝよ　路郎

の見事な大幅が眼を奪う。

〈私はもはや路郎に殉死した身体―〉

とある葭乃さんの書信の一節が忽ち胸に甦るたたずまいである。これらの遺品を見上げる部屋中央のこじんまりした長火鉢の座につくと、その中の南部鉄瓶が温く湯気をはらんでいる。見回わすと、あたりの壁や小さな書庫のあたりには、画家、俳人、芸能人、川柳人の大モノ、小モノの額や色紙や短冊が風雅なムードをかきたてている。

板敷一枚を加えて横長七畳、面白い部屋でしょう―と微笑しながらお茶をいれて下さる葭乃さんと、やがて雑談しきりの一ときだが総じて路郎先生生前のお話ばかり。その茶話も一きりのあと

「路郎に関する門外不出の、とっておきの好資料があります。お見せしましょうか」

と葭乃さんがおっしゃる。願ってもないことと大きくうなずく私の前に、やがて古色蒼然たる古文書の一冊がとり出されてきた。黄色な故紙に変じた、それはコクヨ罫紙が背クロス表装でとじ込みになった部厚いもの、表に

「麻生路郎先生伝記資料　福田山雨楼記」

とある。

書かでものことながら山雨楼といえば、柳界熟知の川柳評論家で、路郎門下の高足、晩年は川柳雑誌副主幹となり、その活躍が期待されていたが、昭和三十年六月十六日惜しくも宿痾昇じて死去された。本名福田義達氏、享年五十七。私の手にしたその古文書の一冊こそその山雨楼先生貴重な遺品の中の一品に相違ない。襟正す想いの卒然たる私へ葭乃さんが

「御覧になるならお借し申上げてもよろしいのよ、川雀に因縁浅からぬ、ほかならぬ貴方のことですから……」

と仰有る。実のところ、私は二の句がつけず呆然となった。歓喜倫躍とは正にこの事だ。

午前十時過ぎから午后二時まで、アート御夫妻の心のこもる昼食の膳に、葭乃さんとおふたりで箸をとる光栄に浴して、私の長っちり訪問もやがて時間とはなったが、訪問の収

獲たるやまことに絶大である。山雨楼先生遺品の資料に加え、葭乃さんがとっておきのこれ一冊という麻生葭乃句集「福寿草」まで強引に拝借しておいとました私だから——。

ここまでくれば「麻生路郎伝」を——帰りの車中でかく決意した私は、早速に帰宅すると同時に、この旨を葭乃夫人に伝えた。折返しのご返事はつぎの通り。

「実録麻生路郎伝のような伝記風にすればよほど年月日も正確に調べてかからねばなりませんから、その辺はあまり肩の凝らないタイトルがよいと思います。もの忘れのよい私に、しかも時間の観念のない私に、あれこれについていつごろのことかと訊かれても困るのです。（中略）まあ、貴方のいわれる〝路郎物語〟をあなた様の御企画通りにお書きになつて結構です。大変お世話様になりますがよろしくお願いいたします」

まさに身にあまる過分なお言葉と、そのお便りが心にしみた私である。

右手に貴重な葭乃書簡、左手に山雨楼メモ、補足は山なす川雑のナンバー、加えて手持ち資料に路郎先生門下の諸賢雲の如し、意を安んじて筆がとれる。かくて大胆不敵にもこの「麻生路郎物語」をスタートさせることにした。

葭乃夫人もご指摘の通り、私はこの路郎先生伝は、卒直にいって実伝というより一篇の物語と名付くドラマに仕上げたいのである。すなわち「川柳」なる特殊なジャンルの文芸にその生涯を燃焼しつくした一川柳人の人生——いいかえればその川柳なるものに悔なく殉じていったある夫妻の物語——といってもよい。随ってこのストリーの主人公は路郎その人だけではない。ある場合には葭乃夫人その人の物語でもあるともいえる。むしろ私にとっては、ある川柳人の妻に捧ぐ……とすらサブタイトルにつけ加えたい想いでいる。

なお、本稿は進行の構成上、すべて文中敬称を省かせて貰うことにした。御諒承願いたい。（S49・10・25）

尾道の風

麻生路郎は明治二十一年（一八八八）七月十日、尾道市十四日町に生れた。路郎は柳号で、幸二郎が戸籍名である。父善七三十四歳、母くに三十一歳の折の出生である。

十四日町（地元の呼称はジュウシンニチチョウ）は、尾道市西部の本町筋に続いていて近くに尾道郵便局（本局）があった。幸二郎が産ぶ声をあげたとき生家は陶器商を営んでいた。この稼業は祖父久助の代からのもので、父善七は通称久七で親しまれていた。

出生した幸二郎だが、どうしたわけか生後程なく尾道市の対岸にある向島の漁村に里子に出された。母くにはその翌年に他界している。数え歳十一歳まで父母の愛も知らぬまま彼には里子の生活が続いた。「写真でみると、母は明治初期型の面長の美人だが、麻生家の嫁にきてから晩年は病身で、海岸通りの寺で養生する生活であった由だが、この母の兄は三条小鍛冶なんとかという刀鍛冶だったときく」（山雨楼メモ）

里子に出された相手方の育ての親の名も、部落の名も、山雨楼メモには記載なく、関係者の間でも全く記憶されていない。

小宮豊隆著の「夏目漱石」の出生のくだりに、つぎの要旨のことが記されている。

「漱石は生れ落ちると里子に出された。彼がなぜ里子に出されたか、それは分からない。漱石の母が、初老になって懐妊するのは面目ない、といったというが、それだけの理由ではなさそうである。漱石の出生が両親から歓迎されていなかったことだけはたしかである。漱石には腹ちがいの姉が二人あった。同じ腹からでも四人の兄と一人の姉が生れている。そのうち二人は漱石の生れる前に亡くなったと言っても、はげしい渦を巻いて刻々と動きつつある当時の社会情勢の中で、一人でも荷厄介が殖えるということは、少くとも父親にとっては、大変な重荷に感じられたものに相違ない」

漱石自身、作品の「硝子戸の中」でつぎのように書いている。

「私の両親は私が生れ落ちると間もなく、私を里にやってしまった。その里というのは、無論私の記憶に残っている筈がないけれども成人の後聞いて見ると、何でも古道具の売買を渡世にしていた貧しい夫婦ものであったらしい。私はその道具屋の我楽苦多と一所に、小さいザルの中に入れられて、毎晩四谷の大通りの夜店に曝されていたのである。それをある晩、私の姉が何かの序に其処を通り掛った時みつけて、可愛想とでも思ったのだろう、懐へ入れて家へ連れてきたが、私はその夜はどうしても寝つかずにとうとう一晩泣き続けに泣いたとかいうので、姉は大いに父から叱られたさうである」

漱石の出生は慶応三年（一八六七）で、彼が二十一歳のとき、路郎が生れている。この間二十年だが、時代環境と親、とくに父親意識には、往時漱石の父のような家庭感覚が多かったらしい。明治初年生れの筆者の父親も、かつてそのような処生談義を試みていたのを記憶している。

夜店の寒いザルの底で眠っていた漱石に対し、路郎はどうか。

「七歳のとき学校へ上る年齢からか、生家に引き取られることになった。だが、家へ帰るのはいやだと駄々をこねるので、兄が背に負ぶって海岸通りを慰めながら、長いこと説得していたが頑として承知せず、ついに家の方ではあきらめて島へ返えした。私はその島の小学校へ上り四年生になるまで通うことになった」（山雨楼メモ）

薄情な生みの親に対する里子のどこか本能的なレジスタンスみたいなものが、漱石にも路郎にも感得される。荷厄介な幼児を里子に出した親側の身勝手さも、ともにこの両者の話の底に漂っているのも心にくる。

駄々をこねる強情な弟を背った兄の名は福太郎、路郎にはこの兄と、二人の姉がいた。上の姉は神戸へ嫁し、下の姉は大阪の嫁ぎ先で年若くして死亡している。（名は不詳）

「私が二十四歳のころ、岸本水府君と二人で神戸の姉のところへ立ち寄ったとき、若い二人を前にして姉から、若いのに川柳をやったりしてはいけない、そんなことは老人になってからやれときつく叱られた。然し私は老人になってはホントの恋はできない。僕が川柳をやるのもそれと一緒だ、と言ってきかなかった」（山雨楼メモ）

壮年期の路郎が、ひところ漱石に熱中して、句会にまで漱石の著作のものを携え読みふけったと、山雨楼メモにも記されているが漱石の生い立ちや、その家族関係などが、ひどくわが身に似通っての上の、それは親近感からもきている、そのようにうけとれぬこともない。

この辺で路郎が出生し、里子の一時期を過した尾道という町についてふれておこう。なぜなら路郎の父母が住んだ、いわば彼の故郷の土と海でもあるからだ。

尾道市は海と山との接点に東西へ細長く伸びた町である。すぐ前に向島という大きな島があるため天然の良港を形づくり平安時代から瀬戸の良港として栄えた。

建武三年（一三三六）足利尊氏が九州征伐の際、ここに立ち寄り浄土寺観音に戦勝を祈願した。この際、尊氏の募兵に応じて多くの尾道の漁師たちが船出に随った。そして死者も出た。この因縁からかこの町には寺が多い。

江戸期に入ると北前船がこの港に出入りするようになり、北日本の物資をどんどん陸上げした。このため尾道は時の豪商で埋った。思えばこの頃が尾道港の最盛期であった。

明治四年の廃藩置県後、近代港湾の面目を発揮する広島周辺に船は片より、尾道港は次第にさびれ、小振りの商港化し漁船の舟だまりとなり、向島に日立造船が根を下ろしたことにより港内ムードは一変していった。

ところで尾道という町だが、奇妙に政財界文化関係の名のある出身者が皆無である。路郎が生前よく口にした法曹界の名物男花井卓蔵にしてからが尾道出身ではなく実は三原市である。とにかくどの人国記をみても尾道市はアルカリ地帯で、強いて探せば頼山陽の愛人玉蘊ぐらいのものだ。

観光尾道の金看板千光寺の山頂から、少し下ったところに〝文学のこみち〟というのができている。ここには尾道の地に関係のある作品をものした作家たちの文学碑や歌碑がずらりとだらだら坂の道ぞいに建っている。数えてみるとなんと二十前後もある。

尾道に旧宅を遺した「暗夜行路」の志賀直哉の碑文より、筆者は林芙美子の「放浪記」の自然石の文字の方が好きだ。「海が見えた海が見える」にはじまる碑の文字は、彼女の短篇「風琴と魚の町」を筆者は憶い起す。魚油のしみついて汚れて光る尾道の石畳にオイチニの薬の手風琴が流れていく。その筋骨のついた古びた軍服姿の父のあとから、みすぼらしい親娘が風に吹かれてついていく。「オイチニの新馬鹿大将の娘じゃ」と蔑すまれる芙美子のこの作品のあとに「市立女学校」がつづく。漂泊の養父母と暫くここに止って卒業した尾道高女（現東高校）には、つぎの彼女の詩碑が建っている。

「巷に来れば思いあり　人間みな吾を思いて　煩悩滅除を歌うなり」

筆者はこの詩碑のさびた面を憶うたびに川柳詩人路郎の幼き日の姿を想いうかべる。くろずんだ夕焼雲の弓型の渚（なぎさ）に、ぽつんとふところ手でひとりたたずむ男の子―独りよがりで片意地で、ひたむきな直情さである癖に、どこか人の世に泣虫で―後年の路郎の性格を織りなす生成の片鱗は、尾道の里子の暮しを吹き抜けていった潮風にもあったことはまぎれもない。

「寺や鯛で知られる故郷の土を、もう二十余年も私は踏まない」

そう述懐したのは昭和九年、路郎四十七歳のときである。

近作

今治市　月原宵明

腕組んで沈思黙考眠ってる
酌ぎ足しただけで献盃仕り
なんとなく冴えた日　遂に失言す
傷だらけの人生　歩ゆむ枯野原

大洲市　米沢暁明

旅なれてちょいと隣りへ行く気持
鈍行の訛り次々旅たのし
訓練は上出来だった消火栓

名古屋市　鈴木可香

バーゲンへ女理性を整える
非常階段まっ赤に錆びて無事な日日
汚れない証拠少女に影がない
原爆症怒りのほかに何がある

岐阜市　市川鱗魚

もみ手するお辞儀男の貌でない
凡人の寝返りあすはあすの風
軍手する社長労使にある敬語

東京都　池口呑歩

養子とは知らず育って憎む母
捨てられるよりはましさと養子口
猫の仔のようにやられた養子先
親がないしようがないから養子口

今治市　長野文庫

持って出た金にあわてる尋ね人
麻雀屋に居るかも知れぬ子をさがし
寄附募集いと丁重に縋りつき
埋めたらと思う時あり瀬戸の海

生駒から

麻生葭乃

年末に「上方芸能」編集部から〝大正デモクラシー〟と笑い―というテーマで当時の川柳界を書いてくれということだった。もともとこのような原稿はぼくの最も苦手とするところで断わりたかったが、恩師秋田実先生のお口添えもあり、つい引き受けてしまった。

この雑誌には大阪ゆかりの学者や人気作家が筆をとっているし、川柳は始めてのものらしいので、うかつに書き流がせなかった。そこで助け舟を麻生葭乃先生や東野大八先生にお頼みすることにした。まず小島六厘坊という天才の横顔から大阪川柳をクローズ・アップしたかったからである。

その時の葭乃先生のご返事が非常に名文なので、先生のお許しを得てここに掲げることにした。（不二田一三夫）

リリ（註・「川柳雑誌」時代の編集長・愛嬢）の家へお灸をすえて貰いに五日程逗留していました。廿日に生駒へ戻りましたらお手紙が来ていましたが、ちょっと疲れていましたので一日休養してからペンを持つことにしました。

小島六厘坊さんは路郎が十六才頃の川柳のお友達であったらしく、私はお逢いしたことがありませんので、どのようなお方が知りませんが、天才六厘坊と自称していられたそうですから、非常に自信の強い文学青年だったのでしょう。小説にしろ詩にしろ読んで置く可き文学書は柳友に紹介して親切に指導していられたと聞いています。

さて川柳のことですが、私が知っている範囲のことをかいて見ます。江戸と上方とは日常の言葉使いも違っているように、川柳も東京と大阪とはおのずから趣を異にしています。東京の川柳は簡潔ではありますが総じて硬さがあります。大阪の川柳は概して柔かくて平易であります。

大阪には西田当百さんが主宰する番傘（関西川柳社）があって、当百さんの二階で毎月例会が開かれました。出席者は大抵五六人から十人までの小集句会でありました。大正の初期の頃ですから番傘の初期の号を調べたらわかります。出席者は多少の変更はありますが、私の記憶するところでは浅井五葉さん、蚊象さん、岸本水府さんを常連として、京都からは馬場緑天さんほか沢山ありますが思い出されません。道頓堀川にそうたお茶屋の主人で俳人の藤原遊魚さん、同じく俳人の松村鬼史さん（柳号は柳珍堂さん）などのお顔も見えました。私はこの小集句会へ父芦村に連れられて出席したのが川柳に手を染めた最初でありました。

日車さんや半文銭さんはこの会へ出席していられたかどうか覚えていません。日車さんと半文銭さんと路郎は後に「後の葉柳」や「雪」に新傾向の句を発表していました。

大正の初め頃は東京でも大阪でもまだ客観句が多く主観句は殆ど稀れでありました。

浅井五葉さんの

「辞職して何をか言わん植木鉢」

「勘忍がならぬでもなしだまって居」

は五葉さんの性格を丸出しにした句です。

水府さんの句は大阪情緒ゆたかな句が多いようでした。私は柳珍堂さんの句に興味を持っていました。

「馬おののき橋おののきて渡り」

田舎のあぶない板のかけ橋を馬が歩くたびにビョビョと動くありさまをよくスケッチしています。橋おののくと言う思い切った擬人法は素晴らしいと思います。又柳珍堂さんの

「駕籠わきの眼にもちらつくうら若さ」

駕籠わきとは葬儀の列に加わり白木の位牌を持ってかごのそばにつきそうて歩く喪主のことなのです。世にありし日の若さが歩きながらも眼の前から消えやらぬ恩愛の情がしみじみとくみとれます。これは柳珍堂さんの句だと私は思っていますが、よくよく調べて原句をたしかめねばうっかりそうだとは言われません。嘗て白柳さんが私の句を抜きとられた事があったのですが、その中で私が考えそうな事ではない内容の句がありましたので「これ私の句とちがいます」と云いましたら「イエあんたの句です」と強引に云われるので、私はどっちでもよいわとだまって終いました。ミスプリントされた句を白柳さんが写しとられたのだと私は思っています。川柳は短いだけになんでも無く扱われることがありますから危険です。ですからこれが柳珍堂さんの句であると言う事が調べるまでは忘れて終って下さい。馬場緑天さんと路郎と私と他四、五人の方と一緒に千日前の写真屋でうつした写真がいつか番傘に掲載されていましたが、懐しいと思ってあなたから見せて頂きました。

さて話は又もどりますが、大阪と川柳と云う題目でかくのでしたら、大阪商人の根性と結びついたものを探して書いた方がよいのじゃないでしょうか。私はとても覚えのわるい人間ですからお役に立たなくてすみません。大阪らしい句をよりぬいてみましたが、なかなかうまい句がみつからぬので止めました。何しろ今私の手許には参考にするようなものがないので困ります。正月が来ないうちに新年の句を作るのは作りにくいですが、出来たら送りますけれど、出来なかったらおみのがし下さい。

十一月二十一日夜　　葭乃

一三夫様

このお礼かたがた一筆お送りしたとき、素晴らしい記憶力をおほめしたわけだが、そのご返事がこれである。（一三夫）

昨日まで話題にしていた歌手やテレビ俳優の名が思い出せないことは今の私には珍らしくないのです。私の脳神経は線のきれた電球のようなもので激しく振ればパッと電流がつながることもあるのです。記憶喪失状態はしばしばです。

「そんなことどうでもよろしやおまへんか」と家の者はあっさり片付けるけれど、恍惚の隣りまで来たと思えば、私にとっては一大事です焦れば焦る程焦点がぼやけて段々遠くへ行って終うのが、はがゆくて何もせずにそればかり考える事があります。ひょっくり思い出せた時のうれしさは二日二晩考えぬいた時間の損失は何とも思わない程すべての面で老化してゆくことのなさけなさは老人にありがちなことでございます。私があなたに先日出しました手紙の中の俳人の姓名や柳友の名も字が違ってやしないかと気にしています。もしお使いになるならば一応、おしらべ願います。大阪と川柳はあなたの企画でおかきなさった方があなたらしい色彩のものになってよいと私は思っています。

葭乃

不二田様

謹賀新年

三井が丘川柳会

寝屋川市三井が丘四丁目
三井会館内
高鷲亜鈍
山本草生

北川春巣著

川柳随筆と句集

『聴診器』

好評発売中
送料共千円

川柳医博として知られる著者の川柳随筆は定評がある。またそのエッセイは学者らしい筆法で路郎先生も高く評価されていた。

われながら完全癖に腹が立ち　春巣

この句が示すように著者は完全をモットーとされている。数ある随筆の中からより抜いたもの十六篇、川柳は四十年間のうちから三百句を自選し、ここに「聴診器」を発刊されることになった。（美麗豪華本）

発行者　〒573　枚方市渚東町二九―二　北川春巣

取次　川柳塔社



川村好郎選

ぜいたくな舌　節約を受けつけず　大阪市　神夏磯　道子
道端の野菊に聞いた耐えること
忙がしい愚痴こぼしてる立ち話
受験前灯りが消えている不安
長髪も見なれて息子を咎めない　大阪市　小谷清女
障子張る手許に早い秋の夕
張り終えた障子の白さ心満つ
一人っ子手放す運命にさからえず
服従の女つめたく無表情
つまずいてからのさとりに似た心　弘前市　小山内貞男
気がつけば烏合の中にいる暮し
石橋がもろく崩れた日の自嘲
あきらめた余生に慾がすけて見え
足るを知るだけが取り得の夫婦です　富田林市　定金冬二

幸福駅の切符が噛えそうにない
裏切りの朝もきっちり歯をみがく
駅の花ひとり別れを抱いている
老夫婦生きる限りの影を引く　尼崎市　大垣たもつ

妻　死去（49・10・13）
ガンを病む妻より重い日を背負い
右と云えば右向く妻が先に発ち
母の死を子等は星の数に入れ
心付けしたグリーン車空いており　鳥取県　林露杖

文化祭点描（二句）
雄渾な筆の運びを眼でなぞり
追憶に浸り静寂の菊に佇つ
蓑虫の蓑にそれぞれある相違
言うだけは言って私案にこだわらず　寝屋川市　柴田恵美子
私の履歴書にまだ恋の欄

嘘一つかくす化粧映えに怖れ
独酌に過去の私が起きてくる
宍道湖に語彙の乏しさ噛みしめる
尼崎市　中谷利美

それからは酒が言わせる恨みごと
恩に着るだからと虫のいい話
満期まで掛けた保険の貨幣価値
誰にでも撮れるカメラで気に入らず
和歌山市　樫村ふみよ

はしやいでるうちにけんかとなる子供
安売りを買い過ぎお隣りさんへあげ
又忘れましたと言うて通る年
秋風を必死にこらえている枯葉
吹田市　藤原世史春

革新も保守もあらずに刷る機械
ちっぽけな活字ときにはドスになり
ペンネームの方が本名らしい人
生きている証拠に活字世相刺す
柏原市　小谷葉子

永い冬に向う心引締めて
寒椿愛の深さを口にせず
捨てられた日から人形自由です
ワルツで始まる75のドラマ組む
岡山県　白岩文衛

公僕のはずを与党さま野党さま
インフレへ鞍馬天狗の来てくれず
このごろの迷う心は箸が知り
島根県　谷岡芳枝

病弱の二人三脚つづく道
晩秋の陽にてれながら柿光る
秋日和つかれた着衣ピンと干す
寝屋川市　江口度

柿落ちる天寿を全うして落ちる
反論をして討論の芯に居る
社長室望遠レンズ磨いてる
名古屋市　大林曲ん手

俸に彩がないから掴めない
この馬鹿と叱った父の墓洗う
友情の河は流れを堰止めず
八戸市　安田勝己

金脈を掘りあて人間臭くなり
執念のまンま蔓草枯れている
青春を賭けた軍歌と子は知らず
今治市　大本バット

病室を抜け出して来て美容院
五色そうめんおんなじ味で喉を越し
自家用で盥回しにされる親
羽咋市　三宅ろ亭

散る前のおしゃれ紅葉の化粧ぶり
金脈のないのが金脈知りたがり

バーゲンの列木枯しを意識せず
鳥取市　勝山紫宏

秋夜長一升瓶がでんと来る
解禁の蟹の値札に息をのみ
冷蔵庫隅までさらえ子等が去に
鳥取市　大塚豊生

傷心へ漁火遠し日本海
銀婚を寿ぐ父母に白髪増え
裏長屋肩寄せ合って世に挑み
新潟県　市川一峯

物価高賽銭値上げして投げる
子のあんま自動あんまも金で切れ
井戸端も無くなり会議の場所を変え
島根県　岩田三和

竹を切り心のささえに立てかける
地平線それから先の波の夢
すてられた里芋の芽は強くのび
鳥取県　伊藤静枝

配遇を亡くした同士背を流し
糠漬の加減もできて主婦となり
公園を一周してもまとまらず
大洲市　宮尾みのり

めぐまれた企業でストも派手にする
一つ齢重ねた昨日と同じ今日
別々の色をさがしている夫婦
大阪市　花田繁子

亡き母によく似てあやしまれる程見つめ
大臣でなくとも今の世落ちつけず
耳鳴を誰にも知れず一人耐え
松江市　岡崎雪美

ツーカーの心が通う孫と猫
夕食の献立予算ままならず
寝化粧をしてもやっぱり齢は齢
大阪市　秋田茂

あんま鍼灸業五年
あんまだこ悲しいこともあったっけ
指太くなってどうやらめしがくえ
一本の鍼に命の灯をともし
和歌山市　秋月宏方

働こう天寿全うする日まで
空港ロビー貧乏人はないみたい
橿原市　西本保夫

不況対策管理職も減らしたら
不況ムード妻の笑顔はまだ消えず
大和高田市　岸本豊平次

聞き上手に話し上手がつまずいた
忙しい妻でテレビも見逃がさず
尾崎市　小林文月

八十年生きてなお世間わかりかね
余命尋し何か遺さんと思えども

音立てた振子に過去を語らない　大阪市　那須鎮彦

長い目で見ると合格点の妻　寝屋川市　福富隆子

後から引っぱられてる長電話　大阪市　堀口欣一

度の合わぬ眼鏡が秋を眠らせる　姫路市　大原葉香

応援旗大学落語研究会　伊丹市　樫谷憂柳

幸福な顔が毛糸を編んでいる　河内長野市　井上喜酔

落葉掻く音に思索の歩をとどめ　新見市　吉田落猿

話よく分りましたでらちあかず　愛媛県　小笠原仲美

世代という重みを孫背負ってる　今治市　園部正則

生き甲斐という土産持ち孫の来る

愚痴こぼす友より向う見ずが好き

見返してやりたい友は先へ逝き

縦貫道荒神様もたち退かせ

豊作を祈り大蛇がたんぼ這う

産まず女の五十の背なにあるかげり

じれて待つ眼にはテレビただ動き

値切り買い暮しの合理化に通じ　豊中市　安藤寿美子

聞き飽きた愚痴に思わず外へ出る

転居とは知らず庭の赤いバラ　愛媛県　小山悠泉

ヒスおこしＡＴＣも更年期

視野一つ拡げ隣と妥協する　松江市　本庄快哉

栗拾い短かい秋の陽を惜しみ

落城の悲しみ老松知っている　島根県　松本文子

スモッグに耐え松並木風情あり

渡り鳥母の伝言なかったか　青森県　波ただお

悩みある友の瞳がすがりつく

一年の計その日から書き変える　高知市　古谷恭一

腰痛に冬の季節を知らされる

コップ酒明日は明日のことである　大阪市　平井露芳

割勘へ酒豪は申しわけなくて

神主の柏手プロの音で鳴り　兵庫県　高橋近江

キャンバスに画けば公会堂若返り

嫁き遅れ娘より親より祖母案じ

地獅耳隣り近所で重宝し

大阪市　新川貞祐

七十を過ぎて待つことに慣らされる
あの時に要る写真をば撮っておく

鳥取市　松本永治

仙人はいいなカスミで食いつなぎ
ばあちゃんが話せば童話生きてくる

今治市　伊藤一郎

集団で咲いて野良菊逞しい
痛いとこさわるが妻の趣味らしい

今治市　真山国彦

華麗なる一族で無く良かったね
平凡の良さが判らぬから狂い

今治市　古野伶人

腕自慢餌代程は釣って来る
車窓から見て過ぎるには惜しい菊

鳥取市　岸本無人

目減りした貯金にチョッピリ利子が付き
値上からやっと馴れたら又値上げ

鳥取県　加藤茶人

時流には乗れぬが家伝ののれん継ぐ
付けやっと払いまた付けで酔い

堺市　堀畑日々子

夫逝き愛鳥もあとを慕いゆく
玄関に亡き夫の靴光りおり

宝塚市　吉田とんぼ

家計簿の赤字へ姑の智恵をかり
たまさかの外出合鍵置き忘れ

出雲市　谷口あきら

百円玉チャリンと悲しい音をたて
言訳になるから唇かみしめる

西宮市　朝山千世子

マンションの友訪うて土の有難味
期待せぬ「天」入選の夢心地

千葉県　鳥飼義久

録音の祝詞聞かされめでたがり
倖せを感じさせてる風呂加減

岸和田市　池田露子

忘れたい過去へ未来の灯をともし
氏神へ無理を承知の願いごと

松江市　梅本登美也

勲章を残し天寿を全うし
人の世のもろさをたたく秋の雨

堺市　栗本藤持

美しく老いたしわれも古稀迎え
人の計も知らずのり出す蝸牛

岡山県　船越洋之

都合のよい弁護をテレビもたされる
田を売った金のパターンにある不幸

高槻市　竹内花代子

保津川下り

激流のしぶきへ亀も濡れてくる
はぜの葉が山の裾から染めはじめ　　備前市　武内雅堂
募集欄の活字企業の罠である　　今治市　渡辺伊津志
点晴が過ぎて油絵見捨てられ　　須賀川市　平栗金太郎
上司から肩叩かれた日のうつろ　　新潟県　高野不二
あの男が云うから嘘になるニュース　　大阪市　横地正彰
削られた山のあばらが見せる飢餓　　滋賀県　柚木踏草
火の車かくす世帯をなぜのぞく　　赤穂市　谷口赤童
反哺の礼人間界にどこえやら　　出雲市　藤井晴月
ウマ合うたひとライバルとなり哀し　　倉敷市　高山みどり
せめてもと妹の肌着ありがたく　　鳥取県　果風庵
合掌に人のもろさが身にせまる　　大阪市　大国たかし
マイホーム妻の理解が今日の幸　　今治市　今井松花
出品もせずに批評をして廻り　　泉佐野市　大工静子
明日あろう菊に名札をつけておく　　八戸市　島田昭治
よその子を育て年頃に逃げられる　　島根県　飯塚虎秋
流れ藻に汚れた老いの垢託す　　高槻市　山田スミ子
トントンと進む縁談ヘチトあわて　　大阪市　須浦つね
何故の涙か知らぬ秋の暮れ　　大阪市　村島秀村
町内会秋の楽しきバスの中　　大阪市　浜西駒子
柿食べて秋の季節をうれしがり　　堺市　檀野茂子
神々の光りとおもう陽を浴びる

同人吟

秀句鑑賞

——前月号から——

橘高薫風

しらふでも踊れるほどにご上達

本田恵二朗

洒脱な作者らしく軽みの味を生かして、うまくまとめられている。踊りの習いたては人前でなど披露出来るものではない。宴席での余興程度のものであった。今では年季も入り、おめでたい席で所望されれば「白扇」や「鶴亀」のほどのものは一さし舞うことが出来るようになった。

老杉の幕切り落して磨崖仏

正本水客

何百年を経て亭亭と聳える杉の大木の森を出はずれると忽然と磨崖仏が目前に現れた。老杉の幕を切って落したという表現は想像するだに適切な修辞である。

妻と云う女で終生名をもたず

小出智子

この作者は次第に在来の川柳に飽き足らず現代の知性的なスタイルを加味した句を創りつつあり、それが軌道に乗って来た楽しみな人である。妻というものの没個性を云い得ている。

超過勤務は秋の夜の虫

渡辺暁童

当を得た擬人法だ。

嫁もらい五十女が泣きに来る

高橋千万子

嫁姑の軋轢、五十をこえた女が愚痴を聞いて貰いにやって来る。さまざまの状態を「泣きに来る」で集約させた旨さが句にドライな目を感じさせることになった。

掘返す史蹟に今日も水溜る

西いわを

国の文化事業への金の使い方は心あるものには納得のいかぬものだが、その貧しさへの批判が一句に盛られている。

母子家庭裏へ佗しいものを干し

出原敬一

母子家庭のつつましさ、世間への気がねのさびしさが強調されて「裏へ」となった。

台風にも政治にも耐え稲稔り

清水一保

農作物も農民も、以前は大自然との苛烈な戦いに精魂をこめたものだが、今はそれ以上に為政者の思惑に右顧左眄しなくてはならない。「政治にも耐え」の所以である。

法学部出て総会屋に教えられ

中村ゆきを

大学の法学部を出た社員が、株主総会での総会屋のてきぱきした進行処理に、机上の論と実戦の違いを思わせられたのである。

合掌の群落墓場のように暮れ

村上春巳

飛騨の白川郷のような合掌造りの民家聚落の暮色の光景である。やや遠望俯瞰の感じに受けとれるが、あたりの空気から墓場に通じる寂寞を感得されたのである。

残照の命集める彼岸花

竹内翁童

盛りを過ぎた、しかも華やかなりしものの哀れさに、殊更心ひかれた作者、命寄せ合う思いは凋落の身に一入の感慨がある。

朝のビル掃除器のように人を吸い

谷のぶお

高所から見ると、朝出勤時のビルは、この句の通りおびただしい埃を吸収する掃除器のように人間を呑み込むのがよく判ることであろう。観点をずらすことが作句の上でも有益なことを、この句は教えてくれる。

泣き止んであたりの銭を掻きあつめ

菊沢小松園

女子供の性態。諍うて、はずみで小銭が散らばった。ひとしきり泣いたあと、現実に立ち戻った意識は、先ず銭を集めることだった。感傷から理性への転換、人情の機微が鮮かだ。

年寄りを敬語で責めて黙らせる

若本多久志

会社の先輩後輩、嫁姑の間にも屢々散見せられることで、丁寧な言葉使いが、かえって年寄りの神経をいらだたせることになるのだ。

水煙抄
秀句鑑賞
——前月号から——

西尾栞

木枯しの妙音サッシに通じ兼ね

三宅ろ亭

木枯しの音はまことにうら淋しいものである。詩人にとっては、そのうら淋しさ、そのせつなさの音が妙えなる音ときこえるのである。ところが最近の窓は、みなアルミサッシになって、折角のあの木枯しのコトコトと窓をたたく妙音が、きこえなくなったという句で、下五の通じ兼ねで川柳になったが、通じかねと仮名書きの方良いと思う。

看護婦の顔が痛み止めになり

大垣たもつ

こんなに快方にむかわれて、まことに結構です。川柳人は痛くとも何とか句にして、少しでも楽になる方法を考えています。白衣の天使という言葉は単なる美辞麗句ではありません。時々顔を出してあげて下さい。

北海道両手に提げて連絡船

吉田落猿

短詩文学は一名省略文学といいますが、上手に省略された句であります。北海道を両手に提げたような言葉使いですが、青函連絡船を想像するのに充分なものがあります。

連絡船包み一つは家出めき　でなく、両手に提げたところ、土産物などで楽しい、ご夫婦の北消道旅行が察しられます。前書の北海道紀行は不要と思います。

出世する気使いのないのに魅かれ

渡辺伊津志

こういうことも、又こういう人も度々あります。別にへんくつでも臍曲りでもないが、これが人の世の面白さでしょう。気使いのないのにという平俗語が大変面白い。魅かれという字も亦面白く使われたようです。

値上げ分湯に浸ったらのぼせ気味

島田昭治

面白い、面白い、近時原点にかえれといわれている川柳です。のぼせ気味でよかったですね、のぼせてしまったら大変です。

最近、詩人らしく、気取ったというか、気張ったというか新しい言葉をつかわないと川柳でないような傾向の時に、一服の清涼剤の一句です。

缶ビール車窓に映る僕がいる

古谷恭一

おそらく、ひとり旅でしょう、缶ビールの明るい一色が車窓にはっきり映っている。

旅情のほのぼのとした一句である。新幹線でないことは確かだ、些かの旅愁もある。旅の好きな人達には、首こうされる句である。

おしやもじもあっとおどろく値上げ幅

梅本登美也

あっとおどろくという言葉は為五郎以来しばらく流行ったが、この場合流行語としてではなく、嫌味なく使われている。物価高でなく、値上げ幅としたところ優秀である。

今回は二三句組から鑑賞させてもらった。余り気張らないところが、川柳味として再認識したいと思うたから、そういったふうの句を特に選ばせてもらった。ご精進を祈ります。

百人一首と川柳（7）

富士野鞍馬

一〇　蟬丸

これやこの行くも帰るも別れては
　知るも知らぬもあふさかの関

この歌は「後撰集」に、「相坂の関に庵室を造りて住みけるに、行き交ふ人を見て」としてのっている。

蟬丸は、その姓名も生涯もわからない。「今昔物語」によると、村上天皇の世に、醍醐天皇の孫に当る源博雅という人があり、その頃、逢坂の関に蟬丸という盲人が居た。この蟬丸は、宇多天皇の皇子敦実親王に仕えた雑色であったが、親王から琵琶の秘曲「流泉啄木の曲」を伝えられていた。博雅はその曲を蟬丸から伝授をうけた。というのである。

川柳も蟬丸を盲人にして詠んでいる。

百人で九十九人は蛇におぢ　（一三22）
　――盲蛇に怖じずという

蟬丸は見へん見へんとなきたまふ　古道（三二13）
琵琶の曲行くも帰るも立とまり　三松（四四13）
千載にてんぼう百人に目くら　雨譚（修二19）
　――てんぼうは腕を落された平忠度
蟬丸の眼は北野ではあかぬ也　留人（六八33）
　――北野は菅原道真、文盲の目を開ける百の内目なし図なしも入れて置　柳舎（営二14甲）
　――図なしは猿丸太夫
また歌の文句を取って
これやこの人は座頭か何者だ　水鏡（四八26）
これやこの行くも帰るも土手の内　都柳（四〇35）

百人一首の本に画像のついたのがあって、それを見て、

蟬丸をとつさんといふ座頭の子　三交（二六17）
せみ丸をとつさまなどとよく見立　（拾四16）
蟬丸に似た人を呼ぶ大法事　如雷（二四30）
頬杖をついて蟬丸歌を読み　翁丸（一三〇31）
また逢坂の関を
蟬丸のよまれた坂に息が切れ　（武十四17）
蟬丸の宮居に近き琵琶の海　カシハ（一二三22）
　――蟬丸神社、琵琶湖
百人の中へ関所を三つすへ　一徳（三六15）
　――他の二は清少納言と源兼昌
人丸、猿丸、烏丸があるので、
人と猿烏と蟬に丸をつけ　升丸（九三3）

「後撰集」の詞書に「行き交ふ人を見て」とあるから、盲人ではないという説もある。謡曲「蟬丸」では醍醐天皇の第四皇子で盲人になっている。

一一　参議篁（たかむら）

わだの原八十島かけて漕ぎ出でぬと
　人には告げよあまのつりぶね

この歌は「古今集」に「おきの国に流される時に、船に乗りて出で立つとて、京なる人のもとにつかはしける」と詞書してのせられてある。

この文句を借りて川柳は

和田の原嫁は参議をめどに取り　巨眼（一五六8）

和田の腹巴も初手は探り兼　芋洗（一四〇10）

――和田義盛と巴御前結婚

篁は小野氏、岑守の子である。二十才で文章生となり、次第に官位も進んだ。承和元年（八三四）に遣唐副使となって出発したが、暴風に遭って帰り、同四年再び出発したところ、またも暴風に会い、正使の藤原常嗣の船が破損してしまった。常嗣は奉請して、副使の船を正使の船に当てることになり、翌五年出発したが、篁は怒って船に乗らず、「西道謡」というのを作って、遣唐使のことを諷刺した。それが嵯峨上皇の御感にふれ、隠岐へ流されたのである。

百人一首遠島ものが二三人　（安元智3）

――他の二人は後鳥羽院、順徳院

承和七年（八四〇）に召しかえされて官位も進み、同十四年には参議に任ぜられた。そして従三位に進み、仁寿二年（八五二）五十一才でなくなった。

篁は、当時博識英才をもって重んぜられ、漢詩文に長じて、その文名は一世を風靡して、「野相公」「野宰相」とも呼ばれ、伝説、逸話が多く残っている。川柳に、

篁は事めいさいによみおかれ　（拾五8）

てうほうな歌を篁詠んで置き　竹子（五〇2）

篁は手にはを種々な物へ付け　集水（二九2）

末世まで名は篁の筆のあと　青志（八五7）

などと詠まれているが、これは「小野篁歌字尽」というのがあって、

春つばき夏はえのきに秋ひさぎ

冬ひいらぎに同じくはきり

という風に、文字の読み方を歌に作って教える書物を詠んだのである。

また篁は、一度冥土へ行ってきたという伝説があり、京都松原の珍皇寺の篁堂は、ここから篁が冥土と交通したといわれている。それで川柳も、

独座幽篁若イ者若イ者　夢中（九一3）

地獄へチョンの間篁とどら和尚　乙（一五三9）

百の内一人リゐんまとこんいなり　（天六宮2）

又行つて来るよとたかむらちよつと死に　（安九智5）

篁婦館たそこれへ塩をもて　山芋（一五三26）

などと戯作している。

東京坂本の小野照崎神社は篁の霊社という。

黄銅六角ボールトナット
及び特殊換物全般
合資会社 西出螺子製作所
大阪市天王寺区空堀町八番地
TEL 代 三四五二―四
夜間 代 四四〇八

ユーモアについて

戸田古方

昨秋ある日の朝の電車の中で「笑うのは中日かロッテか」という見出しが前の人のスポーツ紙からチラリと見えました。勝った方が笑うというのでしょう。ユーモアにはいろいろ難しい定義もあるらしいのですが、一応、「笑う」ということにしておきます。

満足したら笑え、そうでなかったら笑えないのが人情。ふと、思い出したのが次の句、

〝モナリザの笑いに私も笑ろうてみる〟

笑子さんのこの句を確めるために十月号の「二賞作家こんにちわ」の頁を開きました。

モナリザの笑は不思議な笑いとむかしから取沙汰されていますが、それもその筈、ダビンチの生きたルネサンス時代は中世と近世の継ぎ目、今日の日本とどっか似ていて、親、夫、子に従わされた三従の封建社会から、ウーマン・リブの戦時の自由の日まで生き抜いてきた女性史の世界そつくり。モナリザの笑いは「笑おおか、笑うまいか」の半笑い。そこをうまく狙って成功している句です。

あらゆるいきものは幸福を求め、自由を求め、笑いを求めて生きているのです。ところが、面白いことに、なかなかそうはまいりません。楠正成の軍旗には「非理法権天」と書かれています。非は理に勝てず、理は法に勝てず、法は権に勝てず、権は天に勝てずと訓ずるのですが、よくそれを知るものは達人といわれる人だけでしょう。天が勝つとは真実、真理との合一を意味し、最後の勝利がどこにあるか、最高の笑いとは何かを、さとらせて呉れています。

川柳の狙いはここにあるのではないか。川柳のユーモアはここから出てくるのではないかと思えるのです。

柳樽のむかしから、川柳人はそういう笑いを追い求めているといいたいのですが、

〝めでためでたでひとり娘をもつてかれ〟

芳子さんの句は、そういう川柳の原点である人情の極致、機微を忘れてはいけないと、私どもに反省をうながしています。

だが、剣花坊以来の明治の作家は川柳の視野を拡げてまいりました。明治の批判精神とでも申しますか、青踏派の女性が現れ、与謝野晶子は「君死に給うことなかれ」と臆する色もなげに詠い上げました。

〝悴せな女にふだん着が似合う〟　智子

人目を気にする女ばかりではなくなって来たのでした。素顔の美しさを誇るようにもなってまいりました。子規によって開かれた俳壇の確立、その影響も柳界ににじみこんでまいります。

川柳も詩であることを自覚してきました。

〝内職に藤色のあるたのしさよ〟　きさ子

しかし、柳人は詩に溺れることもなく、生活の苦しみの中にさえ楽しみを見出す道をみつけているのです。

路郎・水府両師の没後、柳人、柳社相互の交流がまろやかになってまいったのはたしかですが、その反面、目標喪失というか、いわば、すべてが群盲になってしまったようなきらいがないではありません。だが、ありがたいことに、誰もが批判精神だけは失ってはいません。批判精神にどんな方向をあたえるかが問題です。嬉しがりのような前衛派、依然として、身辺の穿ちばかりを探し求めるもの。見方によっては百鬼夜行ともいえそうです。笑わずにいられぬもののいっぱいつまっている世相の反映かもしれません。

〝飾り壺一枝さされた事もなし〟　芳枝

〝宝石の悲哀永住権がなし〟　紫

私はこの二句から、はっきり社会批判を読みとることができて、ホッといたしました。飾り壺、おそらく、はじめは名もない土くれ、

名工の手にかかって、見事に美の権化になりおおせたばっかりに、液体を入れる用器にもなれず、花を活けて楽しまれることもなく、只眺められているばかり、壺自身に喋らせられたら、どんな不満や不足をいうでしょう。重文、国宝になったばかりに拝むことを忘れられた仏像の場合のように。また、宝石、たとえばダイヤモンドとして、ガラス切りとか精密機械の締め金にもならず、ただ佳人の虚栄に奉仕し、時には金のかたとなって転々、人の世の厳しさを見せつけられて。飾り壺の悲哀、宝石の嘆きをじかに聞く様な気がします。確かに現代社会のどこかに転っている悲劇の断片。それはその儘喜劇にもなり得る。立派なユーモアの詩といえるのです。

〝小出しする愛円周をかけている〟　葉子

この作品を取り上げるところまできました。

自ら愚秀といった親鸞。人生の幸福は胸を張り、足を踏み鳴らして歩くことかもしれませんが、少し考えるならば、それは全くの自己陶酔、自分の正体に気づかぬ未熟ものの姿です。「稔るほど頭のさがる稲穂かな」といわれているように、自らの愚かさ、至らなさ、醜さに深い反省と懺悔をすることのできる人にしてはじめて、最後の踏ん張りも利くというもの。最高の幸福、最深の笑いを期待しうるのです。永遠の輪廻を悟り、この至らぬ愛のままで、丸通る、行詰らぬ不変の愛に再生されているのがこの句境。いみじくもゴールインされた作者のいつわらぬ心境が選者の眼にとまったのではないかと喝采されます。

新年恒例の「ユーモアについて」の稿を求められ、右顧左眄の末、川柳塔十月号の「二賞作家こんにちわ」に吸いつかれてしまいました。三十余年間、女の子に取り巻かれて暮してまいりました私。やっぱり、女の方のご厄介になってしまいました。

それにしても、女のお顔の多い句の集りは発展すると申します。中性化していても、私も男、男たちも負けぬように頑張ってほしいとは思うものの、さらに、さらに、新しいウーマン・パワー、女流作家の益々のご健闘を祈らずにはいられません。このごろ、ふと、やっぱり齢ですかな、日本女性の心の奥底に失ってはならぬもののあることに気がつきかけています。ずばり申しましょう。良妻賢母ということを考え直したらということなんです。良妻賢母は封建の中に育った美徳です。だが、いいたいのは、今日、核家族になっても通用する良妻賢母。ウーマン・リブとも両立するもの。外圧ではなく、銘々の自発的行為として発露するものです。それは女性自身の自己発見から尊くも流れ出るのです。

幸福につながるウーマン・リブ。自我の主張や権利にしがみつくことだけが能ではありますまい。廻りの人々をも自分と同様に理解し尊敬する。やがて人々の中に自分が生かされる。それに気づかれてこそ、不変の幸が拡がります。そういうネオ良妻賢母。教育ママではなく、膜のできる母。盲従でなく、愛情細やかに、協力しうる妻が生れます。

川柳する女性なら私の提言が分って下さると思います。かくしてこそ、全身全霊の笑で受止められる、最高のユーモアを解する世界がひらけてくると思うのです。

一分間の柳論

岡崎祥月

路郎先生遺訓に川柳は人間陶冶の詩と言われている。我々はその教えを守って川柳に精進している。最近難解句がどうのと騒がれているが私は難解句も自由律も賛成だ。だが五七五や七七五にまとまるものをことさらに字あまりや字たらずにするのは好まない。私はマンネリをさけて新風に精進しつつ句を磨いている。それには流派を超越して各句会、大会に出席し投句している。もう一つ自己の句を尊重し大切にしている。それと和を結ぶことだ。

川柳に和を結び友情の和、家庭の和、夫婦の和と和と川柳の中に生きている。言うは易し行いは難しという格言通り私は実行している。決して年期を鼻にはかけていないが、やはり亀の甲より齢の功である。川柳よりなんの取り柄のない私は日々出来るだけ川柳を作っている。テレビより新聞よりヒントを得て句も磨いている。終りに自句を二三句載せてペンを置く。〝川柳のたねまく骨を惜しまざる〟〝友情の和と和を結ぶ糸となる〟〝自画自筆自句釜元で焼く茶碗〟



川柳ゆーもあ特集

—同人作品—

（到着順）

何流か知らねど苦い茶を出され　高槻市　福田丁路
聖とも何処か抜けてるとも云われ　大阪市　大坂形水
民報のようだとＮＨＫ言われ
粗相した犬悪びれた目を向ける　大阪市　山川阿茶
自分のエアポケットに自分がはまる時
フリーセックス外出は堅固なパンタロン　大阪市　川口弘生
水茎の跡美しく振られたり
骨董屋のあるじ骨董の顔してる　東京都　山根白星
アンテナを出さず払わずよく見えず
霊柩車速度違反はせぬ習い　大阪市　西出一栄
もろ肌を脱いで主治医に舌を出し
難聴の横に振る首縦に振り　宝塚市　傍島静馬
洗濯好きの妻に着ごろを脱がされる
テレビドラマいまわのきわによく喋り　岡山県　浜野奇童
参観日夫の口調で子が答え
子が決めたことです父の目も笑い　東大阪市　久米奈良子
階段を落ちて笑える痛さなり
子の手紙教えた筈の文字がなし　守口市　羽原静歩
あの世にも等級がある葬祭店
横文字はペラペラスープ音を立て　八尾市　高橋夕花
書道展読めない文字も書かされる
子の留守は呼びすてされて妻たりぬ　神戸市　仲どんたく
ベレー着てアーティストたる顔となり
釣競技殺生ぎらいの一等賞　倉敷市　野田素身郎
仕事納めバーの借金だけ残り
エレベーターおんなじ柄と乗り合せ　堺市　城一舟
止めんでもええ酒やめて老けてゆき
金婚が来ても初恋忘れてず　岡山県　出原敬一



入港の夫とは地味な柄で逢い
柳井市　弘津柳慶

診断はホウレン草をもっと食え
橿原市　岩井本薩棒

足跡へマアマアマアとおいかける
交差点ピリピリピリと叱られる
和歌山市　沢山福水

浮世絵の浮き出る猪口をめでたがり
旅一夜襖一重に血が騒ぐ
大阪市　室谷徹舟

雨宿りうっかり踏んだ自動ドア
定年へ牛でなかった事の幸
倉敷市　藤井春日

家計簿が二ツ入るのも共稼ぎ
おはようさん誰かと振り向きや鸚鵡です
倉敷市　能登原白水

卵の年が一度に出来た双生児
手料理は下手です流し台豪華
貝塚市　行天千代

もう帰ると言いつつ盃離さない
一千万夢見て買えば皆はずれ
倉敷市　稲田豊作

前ボタン忘れて客がかしこまり
無惨かな恋人猫に唇を寄せ
氷見市　関美子

幼な妻持って個人教授というかたち
ベストドレッサーか知らねど変なアイシャドウ
橿原市　岩井本薩棒

すき焼きの匂い寺から流れて来
初荷もう叱られて居る免許証
西宮市　藤村メ女

向いからあくびが移る終電車
一滴も飲めぬ女のかくし芸
大阪市　本多柳志

時価とあるメニューへ財布たしかめる
全国区入れる自由をもて余し
大阪市　児島与呂志

主賓もう居らず酒宴に雑魚残る
鼻唄でご隠居パチンコから帰り
東大阪市　斎藤三十四

家に居ないならパチンコ屋探せ
唯今と鞄だけの孫かえる
高槻市　若柳潮花

どうせまた嘘の手紙が濡れて着き
食欲の湧かぬお膳にすわらされ
守口市　村田瓢太

ストリッパーの腹に見つけた手術跡
おはようしか言えぬ九官もてあまし
大阪市　稲葉星斗

高過ぎた温泉宿から来た賀状
あみ棚に傘を忘れて春の旅



富田林市　今西寿子

小細工がいやらしゅうてサヨウナラ
休日に減食するはず食べて寝る

大阪市　竹内一世

わが噂出るに出られぬトイレット
履きぐせも親そっくりの下駄並び

鳥取県　鈴木村諷子

銀行の自動ドアからコンニチワ
恭しう秘書の祝辞を読みちがい

出雲市　原独仙

夜逃げした時もあったに廻り椅子
悪友を識る奥さんもへらず口

鳥取市　両川洋々

顔立ててやれば二度目も来て甘え
やんわりと不貞寝の寝酒効きはじめ

尼崎市　黒川紫香

番小屋のお茶ぬるくとも温たかし
えらいさん来やはり掃除行き届き

大阪市　天正千梢

地鎮祭借金の額を忘れかけ
一と廻り下の女房にだだをこね

奈良市　宮口笛生

しめやすいように鶏出来ている
棟落ちようが娘二人をほっとけず

高槻市　山田季賛

結論が行詰り釘づけでする協議
対等に話をすればおもしろい

倉吉市　奥谷弘朗

許可されたビールの小瓶に目を細め
俺よりも炬燵を好む妻となり

名古屋市　吉田水車

村芝居幕ひっかかりひっかかり
美容院出てしばらくは首を据え

松原市　玉置重人

後添いが欲しい離婚三カ月
サンプルに味書いてないビーフカツ

大阪市　正本水客

先客の温みへ歯医者すわらせる
冷凍やろと妻の料理を馬鹿にして

大阪市　中川滋雀

偶然のように顔ぶれ寄ってくる
百倍になる筈だった口車

岡山県　浜田久米雄

気が楽な証拠社会の窓が開き
自分で書いて読み読み泣いている弔辞

姫路市　梅谿庵不酔

除夜の鐘泣いても笑ろても又一つ
鬢まで冠って見ても年は年

堺市　高橋千万子

隣から遠廻りして来た年賀状



ため息もつめた風船ある師走

羽曳野市　塩満敏

地下鉄の初荷大事なお客さま
オールB平気でござる冬休み

伊丹市　小川静観堂

あの妓のことで関東軍へ追いやられ
あの世へのTAXI代も値上りか

岡山市　川端柳子

責任は持たず目覚まし鳴りつづけ
酔う程に肩書脱いでただの人

岡山県　竹内翁童

振り上げたコブシ冗談にしておろし
体重の増減服をあわせさせ

堺市　伏見茂美

旅みやげ自己満足を重く提げ
押すだけのカメラへ母は不安がり

逸名

乾杯はビールの量を比べてる
特級を頼み屋台を追い出され

鳥取県　森田布堂

叱られてる電話交代して怒鳴り
使い捨て時代産み捨て児捨て親も捨て

兵庫県　河原みのる

猪でない証拠に煙立てておき
家計簿のペン鋒先となるこわさ

呉市　槇田英詩

新妻の鼻は甘えるためにあり
左利き刺身をつまむ右を持ち

高知県　川竹松風

欠伸しただけで新婚笑い合い
社会見学として見るストリップ

藤井寺市　西いわを

仏さま偶にばら寿し召し上れ
甚六にまた甚六の子が生まれ

東大阪市　竹中肖二

鼻声にだんだんゆるむ皮財布
悪ふざけ謹言居士が酔うている

東大阪市　竹中綾女

老夫婦譲り合う間に席取られ
お礼などと言いつつ受ける金包み

大阪市　飛田好一

フラダンス腰のあたりが気にかかり
酒屋まで僕の断酒をほめてくれ

八尾市　大路美幸

数の子じゃないかと浦島開けて見る
かぐや姫居ぬかと竹切る子無し妻

今治市　月原宵明

録音テープみたいに行っていらっしゃい
酒臭い夫をなだめ寝かせつけ

大阪市　河井庸佑



かけっこのびりの子どもも夢があり
ライバルもいっしょにされていた左遷
兵庫県　遠山可住

町長へ国会並みの風当り
飲んでいる時のファイトがほしい部下
岸和田市　福浦勝晴

悲壮なる決意でフグを食べに行き
情熱のタンゴで彼氏の靴を踏み
神戸市　小浜牧人

善人の面ずり落ちて酔うている
めがねの度の狂い気付かぬお人好し
加賀市　細呂木魯木

騒がれたみどりも落葉をもて余し
お迎えか甘茶か顔々駅に立ち
新宮市　大矢十郎

そばが来て員数外が一人起き
セン抜きも帯から出ると高くつき
島根県　小砂白汀

愛語さえ破れるダンプの運転手
捕らえたら万引オシッコたれ流し
松江市　中川晃男

笑われる顔おはやしに乗せて出る
何のため笑ろたか忘れるほど笑い
三重県　川上大輪

国宝の屋根とは知らず鳩の糞
近所まで行って戻って来た賀状
呉市　林野甦光

地鎮祭地震があって中止する
三面鏡見ている判じ絵のように
和歌山市　津田与史

お年玉孫はそろばん提げてくる
初詣信心でない顔並び
大阪市　西川蓄二

文春の火に身を焦した田中さん
百八の煩悩抱えて年を越し
八尾市　内海幸生

目出度い日父親だけが掃き出され
そうでっか妻は背中に耳を持ち
柏原市　大峠可動

人間の枯木に似合う頬かむり
紅椿ぽろり地球を尻に敷く
笠岡市　出原真奇

松とれてそれから禁酒するつもり
風呂敷を広げ縮めるのり固り
玉野市　小谷仙山

火の車押して景気を追い回す
ドアの手が迷って居ます笑い声
京都市　松川杜的

独楽が廻ってる楽しくなって来る
雲を見る暇が欲しいと思う日日



犯人は迷宮　頼るは犬の鼻
大阪市　福井野迷路

赤旗はなぜ左手で振らないか
倉敷市　本田恵二朗

ポンコツ車さあ抜き給え抜き給え
独酌が巻き舌で言う独りごと
大田市　藤田軒太楼

もう利いてよさそう盛った鼻薬
不義理した敷居の高さへ妻をやり
倉敷市　水粉千翁

しんがりのそれでもあひる尻を振り
しんみりと義理を聞いてる生欠伸
大阪市　黒田真砂

腹立てて当れば抽出しまで脹れ
背のびした代償へそくり0になり
岸和田市　葛城伊三郎

道聞けばポストだったよ霧の朝
歌留多会熊手のような手も交じり
京都市　都倉求芽

地下街を出て結局はドボ濡れる
満開の駅へ急行停まらない
島根県　堀江正朗

もう色を忘れた花の名を覚え
老い呆けになりそう正座崩されず
島根県　堀江芳子

くしゃみひとつで家中の箸止まり
背骨むず痒くないのか失保受け
岡山県　永宗宗義

すき焼きで良かった一人ふえ二人ふえ
あの雲が雲がと交わす月見酒
大阪市　浜田儀一

テキストの匙を信じた塩加減
鈍感なひとネと云われ誰のこと
竹原市　森井菁居

酔うて来て話のわかることを言う
嘘をつくにはシャンデリヤ明る過ぎ
大阪市　金井文秋

造花ではないんですなと触れてみる
地下鉄とバスは只です寝たっきり
大阪市　宮尾あいき

ポンコツになって夫婦のさしむかい
香たいて貴方と呼んで満ち足りる
大阪市　小出智子

やじろべえにもなって一家の和を保ち
エリートコースママが背伸をしてるだけ
大阪市　河野君子

空っぽの頭で親の威は保ち
七五三主役がママに変りそう
大阪市　柳原静香

きれいだと褒める夫は酔うている
デパートで赤字の家計忘れさせ

川柳 セイタカアワダチ草

菊沢小松園

時代の悪る草、セイタカ、アワダチ草の雑題に取組むことになった。素よりの凡骨に鞭打っての一夜に得た粒々の五十句、と言っても、テレビ見ながらの苦吟であって見れば、尚善提樹下の苦しみには遠く及ばず、粗製ながら捨てかねて編集部へ恐そる恐そる、老骨の切端の一端も川柳塔の将来を担う若い次代の原動力の方々への一矢の役ともなれば、これこそ怪我の功名、望外の喜びというものである。

五十句

豚の餌に混りセイタカアワダチ草上陸す
日本よいとこセイタカアワダチ茂る
考えもせずセイタカアワダチ増えにふえ
亜米利加の毒を日本で撒きちらし
咳の出る花粉セイタカアワダチ知らぬこと
雑草の性をセイタカアワダチ露骨
雨に風にセイタカアワダチ生殖す
咳の出る位い何んじゃとほざいたり
抜かれても焼かれてもセイタカ、アワダチ生え茂り
野育ちの強さ何処の水にもすぐに慣れ
日本の野草をセイタカアワダチ席捲す
雑草の王者日本へ君臨す
押し倒されてもセイタカアワダチ花を附け
焼かれてもセイタカアワダチ離れない
野仏を黄色く撫でるセイタカアワダチ草
値上り待つ土地セイタカアワダチ派手に伸び
土一升金一升とセイタカアワダチ開いて居ず
伸び切ってセイタカアワダチ秋に逢い
建て売りの手抜きをセイタカアワダチ草も見る
セイタカ、アワダチ実らぬ悪へ気をつかい
背高泡立ち女の方へ同情す
風戦ぐセイタカ泡立ち場末の美
裂帛の声をセイタカアワダチ聞き流し
接吻ぐらいセイタカアワダチ気に止めず
弄ばれるとこをセイタカアワダチ草隠し
セイタカアワダチ一対一は気に召さず
育ちのよいようにも遠くからは見え
日本は第二の故郷セイタカアワダチ根をおろし
こそ泥も上手にセイタカアワダチ草利用
セイタカアワダチ近親相姦朝飯前
三角関係ぐらいセイタカアワダチ草嗤う
セックスを奇麗にセイタカアワダチ草見せる
犯罪を上手にやれとセイタカアワダチ草
何ちらから吹いてもセイタカアワダチ草靡き
四面楚歌セイタカアワダチ草も埋め
虎の尾の頃は花屋で金になり
建売の潰れたあとをセイタカアワダチ見遁さず
金になる屍体とセイタカアワダチ草も知り
白骨になるまでセイタカアワダチ知らん顔
共犯の疑いもあるセイタカアワダチ草
アメリカも不景気セイタカアワダチ草が告げ
霊柩車セイタカアワダチ欲迎す
敗戦の墓標セイタカアワダチのみち帰る
風に倒るるセイタカアワダチ毒婦めく
月に葬めくセイタカアワダチ魔女となる
明日を信じてセイタカアワダチ草背伸び
背高泡立ち終に日本へ帰化す
伸びるだけ伸びてセイタカアワダチ草倒る
月に媚びセイタカアワダチ陽になびき
倒れても毒ある花の土に泌み

待望！

日本川柳協会生まれる

十二月一日名古屋観光会館に於て、全国川柳吟社の主宰者、責任者五十二名の出席の他、八八社の委任状のもとに、同創立準備会に引きつづき日本川柳協会創立総会を催された。

常任理事に、川柳瓦版の会片山雲雀、川柳

塔社中島生々庵、番傘川柳本社近江砂人、川柳文学社堀口塊人、川柳二七会松本きつじ、大陸川柳同窓会大井正夫、川柳人協会藤島茶六、番傘みなと川柳会伊藤柳涯子、平安川柳社福永清造、京都番傘川柳会平賀紅寿、ふあうすと川柳社増井不二也、時の川柳社三条東洋樹各氏に定る。尚創立に参画された百六十六社が理事に定る。

（高杉鬼遊）

第26回大阪文化祭（49・11・10）
川柳大会記

有信新之助

百十二名の参加者だった。中之島中央公会堂三階集会室に、関西学院大学教授橋本敬氏の、くだけた調子の経済学の講演が流れ、おもしろおかしく実例をひいた、為替レート、物価、税金の話に、時折り静かな笑いが起こる。

大会の進行は例年の通りで、特に書くべき事もないが、いつも感じることは、参加者の少ないことである。大大阪市の文化祭ともなれば、三百や五百の人が集っても不思議ではないのだが、衛星都市の文化祭の参加者にも劣っていて、お世辞にも盛会であるとはいえない。

その打開策は、年々何処かで論じられているようだが、要は作品の質の向上と、優れた作品を的確に捉えて世に送りだす、新鮮な感覚と柔軟な識見をもった選者の出現との相互関係に在ると思われるのだが各柳社に於いても、選者のパターンができあがっていて、新進の進出がはばまれているからではないだろうか。

そういう意味からでは、今年、前田芙巳代氏が紅一点、披講の席に立たれたことは、一つの救いであったと思う。

年に一度、在阪柳社が一堂に会するのだから、文化祭というお登りを、和やかに終らせるのではなく、各柳社が一年の成果を問うために、しのぎをけずって競い合うといった、ピリピリした雰囲気の中で句筆に向えば、おのずから、レベルの高い、密度の濃い作品が生れてくるのでないだろうか。

ビスケット半分呉れる係を抱く

これは今年の秀吟の中の一つだが、何もいう必要はないと思う。大会低調の遠因と、これからの打開策の答えが、この中に隠されていると思う。

★

▼前号訂正―P5下段九行目は「**御仏壇ただ鶏頭の花赤し**」（山川阿茶氏作）

★

▼川柳塔社常任理事会は12月4日、**編集会議**は12月18日に開かれたが次号に発表。

兎

河内天笑選

うさぎ一匹ハンター高いものにつき　軒太楼
うさぎ耳地区のニュースの早いこと　古心
山の子もうさぎも通う雪の径　可生
白うさぎ童話の世界では主役　魚山
兎もうあれから昼寝やめました　暁明
野うさぎも時に出てくる分譲地　悠泉
白うさぎいつも泣いてる目が似合い　豊生
パンの耳うさぎに残す保育園　登美也
二兎を追う若さが欲しい昨日今日　重人
又何か聞き出して来たうさぎ耳　好一
卯の年の粗品兎の揚子立て　肖二
矜巻のうさぎがはねるお正月　隆子
故郷のうさぎもブルに追いやられ　秀峰
うさぎの仔頬ずりされて暴れ出し　一風
鍵っ子がうさぎと話す日暮れ前　伶人
何もせぬ子だが兎の巣は掃除　松花
うさぎの餌とって毒草見覚える　国彦
長い耳描けば兎に見てくれる　一郎
野うさぎに急ブレーキが間に合わず　バット
童話劇うさぎの耳は二つ折れ　香珠夫
焼鳥と言うて兎の肉も混ぜ　春日
カチカチ山会長さんの子が兎　本陰棒
ペットでの暮しうさぎにある不満　茶人
満月は孫とうさぎの国へ飛び　紫宏
名月のうさぎ科学を忘れさせ　翁童
飼育箱いつかは出たい耳を張る　静枝
兎年窯元うさぎばかり焼き　綾女
雰コンマ一を張り合ううさぎとび　克枝
うさぎ年物価ははねてほしくない　道子
アップリケみんな兎で春を着る　里風
幼児にはうさぎ餅つく月でよし　正則
母の膝なつかし月にうさぎ住み　菩句
飼兎のつぶらな瞳に見つめられ　思月
可愛らしい兎へかわいい唄が出る　保夫
汚名もう返上したい日の兎　カズエ
南天の実と葉残して兎溶け　どんたく
飼兎自然へ還る穴を掘る　静泉
山うさぎ見つけたランドセルのボス　奇童
幼稚園飛べば兎の耳が落ち　木魚

佳

学校のうさぎに児等のまあるい瞳　祥月
うさぎ狩りはなした兎みあたらず　寿美子
絵日記のうさぎはみんな手をつなぎ　カズエ
亀公に敗れてうさぎ貝になり　英詩
うずくまるように兎は次の策　凡九郎

人

雪うさぎ南天盗むはめになり　無人

地

兎にも亀にも愚痴のある噺　千翁

天

提げられる因果な耳をもつうさぎ　宵明

軸

満月の兎がはなしかけてくる

賀正
50年元旦
関西奇術教室
校長　村田瓢太

寒行

直原七面山選

寒げい古へ少年達の弾む声　正則
寒行が終った夜の無礼講　バット
寒行で鍛えたのどで経を読み　一郎
大声を出して寒行温まり　伶人
後家さんになって寒行熱が入り　一風
凍る夜も心が燃えて居る寒行　右近
寒行の群が吹雪の中に消え　右近
寒行を待ってたように雪が降り　白水
寒行へ老婆炬燵で手を合わせ　肖二
町内を出てから寒行太鼓　寿美子
気が合うている寒行はよく叩き　いわを
寒行へ接待が出る門構え　いわを
寒行の口に念仏まだ止まず　英詩

寒行老妻に代って風呂を焚き　豊生
寒行を終えて夜更けの湯に浸り　豊生
寒行へ色っぽいのが来て乱れ　与史
寒行の太鼓へ明治の母達者　三十四
寒行の白夜へ虹を架ける滝　本蔭棒
寒行の太鼓と鈴がすれ違い　香珠夫
寒行のここ一番へのどが割れ　里風
邪念捨てて寒三十日の荒修行　春日
遠くから寒行の声やってくる　敏
水ごりの熱気をおびたお題目　代仕男
星空へひときわ冴えて寒太鼓　代仕男
寒行の禅僧の眼のひたむきに　伊津志
飛び散ったしぶきが凍る滝に率し　伊津志
耐寒の苦行に僧の憐ものび　軒太楼
暁の寂まり切りさく寒げい古　軒太楼
寒行の子へ芋粥を炊いて待ち　悠泉
寒行をする気になった子を信じ　悠泉
寒行は無理よと痩身いたわられ　克枝

佳

寒行の鉦野良犬の怒気に触れ　宵明
盛り場の灯へ寒行は背を向け　魚山
寒行に混る女に秘めた過去　仲美
寒行へ諸行無情の鐘が鳴り　福水

人

寒行の太鼓信者へ活を入れ　悠泉

地

寒行の太鼓一途な音で鳴り　重人

天

弱虫の意地が寒行続けさせ　克枝

軸

信心とは別寒行で身を鍛え　代仕男
わけもなく国旗にジンと来る異国　代仕男
日の丸を振ってた母も子も過去に　静枝
スポーツに国境はない万国旗　悠泉
祝日の国旗は守衛だけ拝み　英詩
別居して国旗を持たぬ若夫婦　肖二
館事館の国旗頼りになる旅行　綾女
日の丸をけなす世相をさびしがり　登美也
国境を云わぬ国旗としてなびき　千翁
民主主義国旗へ若さ妥協せず　英詩

佳

核家族国旗も出さず遊びに出　松花
日本が嫌いか国旗たてぬ家　竹馬
日の丸へ親子の意見食いちがい　思月
頂上へ立てる国旗も入れて発ち　洋々
赤旗は林立国旗の無い集い　右近

人

革命の血には染っていぬ国旗　宵明

地

三十年まだ日の丸に悔のこる　古方

天

日の丸が見た激動の五十年　与史

軸

沿道の国旗陛下を待つばかり　ろ亭

国旗

伊藤茶仏選

万国旗ひらひら心浮き立たせ　一風
敗戦の責を国旗になすりつけ　一郎
日の丸が一番良いと日本人　七面山
あの日から国旗庶民に忘れられ　福水
日の丸に済まぬ国内荒れている　魚山
この旗の下火の玉と燃えた過去　本蔭棒
かつては死を誓ったこともある国旗　素身郎
国旗へは後進国も胸を張り　勝己
日の丸を忘れて暮らす団地族　思月
一着とビリに日の丸ふって呉れ　不二
国旗より赤旗見る日多くなり　無人
老骨は夜明前から旗を出し　漫柳
祭日の日の丸ぽつりぽつり立ち　どんたく
国賓の先きに国旗が風を切り　ろ亭
万国旗舌かみそうな名もまじり　カズエ
外国で見れば日の丸たのもしい　与史
優勝の国旗へ青春賭けてきた　静泉
堂々の日の丸今やちぢこまり　良二
侵略の汚点もあった国旗です　敏
国旗にもうなだれる日とはためく日　仲美
建て売りの団地に一軒だけ国旗　翁童
寄せ書きの旗へ老兵語らない　みのる
国旗も二つ一つの国になりきれず　凡九郎

初歩教室

題 ―「晴」―

本田恵二朗

取り入れもすんで娘の晴着縫う　サヨ
（取り入れを終え縫い急ぐ娘の晴着）　呑歩利
晴天と見得切る裏に黒い影
（晴れ晴れと見得切る裏に黒い影）　露杖
試歩に肩貸して晴れ晴れ妻の顔
氷のうを乾して大きく晴れた窓　同
（氷のうを乾した病窓の空青く）
（氷のうよさよなら病窓の空晴れる）　美子
へそくりが晴着に化ける七五三
孝行の旅へ晴れ間の富士も見せ　静泉
（孝行の旅窓へ富士山晴れてくれ）
晴着見て顔の作りが気にかかり　頼次
（晴姿顔のつくりが負けている）
疑いを晴らす言葉を選りに選り　大成
（疑いを晴らそう言葉捜さねば）
天晴れはミニヘロングへ身を合わす　同
（ミニロング天晴れ五体を合わせてる）
山晴れて谷の紅葉を見納める　静枝
（見納めの紅葉へ山波晴れてくれ）
満天の星空晴れを予告する　洛酔
（あすは晴れますよと星に囁かれ）　伊津志
忍耐と運で築いた晴れの椅子　翁童
雨後晴と易者のさじ加減　同
日本晴れですよと引退が負け惜しみ　紫宏
積年の願い新築の朝が晴れ　同
借金が済んで晴間が出た思い　同
飛行雲日本晴れが二つ出来　無人
晴天の連休財布は底をつき　同
（連休の晴れが財布を軽うする）
晴れ晴れと新春寿ぐ膳につき　誓二
（晴れ晴れと頭が揃うた屠蘇の膳）
晴れ予報フル回転の洗濯機　カズエ
（洗濯機日本晴れがこき使う）
（洗濯機こき使われる日本晴れ）　同
晴れ予報おむすび握る手がはずむ　貞祐
大晦日借り越させぬ日本晴れ　同
文春に抜かれて新聞晴れやらず　同
（文春に素破抜かれてから晴れず）
濡れ衣が晴れて辞表が宙に浮き　利美
呱々の声妻よ天晴れ男の子　同
（呱々の声天晴れ男の声で挙げ）
夕焼雲あすの晴れを約束し　三十四
（あすは晴れですよと茜雲が言う）
青空が高いよ秋も深まりぬ　同
（青く澄みきって秋空の得意顔）
再婚でも嫁ぐ日は晴れがましい　日日子
（再婚の心新たに青い空）
（再婚の晴れがましくも嬉しさよ）
晴着きるしつけ抜く音澄んでいる　益子
（しつけ糸晴れ晴れと抜く嬉しい日）
晴姿叙勲受章の母ありて　同
（晴れの叙勲老母の笑顔と写される）
（勲章を見せる老母あり晴姿）　本蔭棒
真白に乾いて妻の顔も晴れ
晴着魔をにらむ目つきで振り向かれ　同
日曜の空の青さへみみず買う　度
老妻が指折り数えて縫う晴着　同
（娘の晴着縫う妻指を折り数え）
（娘の晴着指折り数え縫い急ぐ）　慶彦
神さまにお尻を向けて撮る晴着
パチンコで晴らす憂さなどたかが知れ　同
肩の荷をおろして新春の顔晴れる　宗義
柏手を打って心も晴れてくる　同
（柏手の音晴れ晴れと初日の出）
長電話女の気晴しかも知れず　幸生
晴れた空見上げる幹事の目の動き　同
（晴れそうな空を見上げる幹事の目）
口笛を吹くから空まで晴れてくる　同
（口笛を呑みとるような青い空）
（口笛を晴れたみそらに吸い込まれ）
振袖に慈愛がこもる晴着　軒太楼
（晴姿母の慈愛が匂いたち）
功成って錦を飾る晴姿　同
（晴れ晴れと錦着飾り展望する）
ヤッホーのこだまもうれし山晴れる　重人
（山彦を呼べば応える青い空）
晴れた朝何から干そう小さい庭　茂美
（サア晴れたなにから干そう小さい庭）
七五三晴着姿の宮詣り　正則
（千歳飴の袋が長い晴姿）
一と言の詫びで霞も晴れてゆき　比呂路
（一と言の詫びでもやもやすつと晴れ）

秋晴れに友とサイクの軽い足　篤史
（秋晴れへペタルも軽い気も軽い）
晴澄の空に浮んだちぎれ雲　同
（日本晴にケチつけるようにちぎれ雲）
あっさりと以下同文の晴れの式　かつみ
お年玉晴着を見てと改まり　同
（お年玉目当ての晴着見せに来る）
難関のテストも終り心晴れ　藤持
（難関をパスした空の青いこと）
晴小袖着し春もあり秋もあり　つた
秋晴れの今日観音詣でけり　同
（秋晴れが観音詣でに誘い出し）
下積の芸長かった晴舞台　道子
（下積に耐え抜き咲いた晴舞台）
初めての晴着に俄か雨が降り　同
（俄か雨晴着の裾をからげさせ）
（初晴着いじわる雨につかまれる）
晴れ渡る今日の天気の心地よさ　生仏
（晴れ渡る空へうきうき若返り）
晴れの今日二人の親に涙あり　潟水
（晴姿見上げ見おろし涙ぐみ）
（嫁姿どっちの親も涙ぐみ）
秋晴れに釣られ乳呑み児まで釣られ　繁子
申分けやつとしたから心晴れ　駒子
（つぐないが出来た心の空晴れる）
疑いも晴れて嬉しい我が家へ　秀村
（疑いの晴れた家路へ歩がはずむ）
空晴れて深まる秋に枯葉舞う　つね
（秋の天いよいよ青し枯葉舞う）
秋晴れに日当り選び孫の守　同
（秋晴れの日向を追うて子守唄）
農園で手入れ楽しみ気が晴れる　ますえ
（気晴しの妙薬農園の土いじる）

題―浮―　一月二十日締切（三月号発表）
宛先　倉敷市下津井一―九―三四〒七一一
本田恵二朗

ゆーもあ特集（締切後追加分）

島根県　錦織文子

おめでたがつづいて財布軽くなり
禿げ残る頭も同じ理髪料
大阪市　不二田一三夫
ワンクッション置かれ　ジョークまた
不発
作家の妻　いつも背中へ話しかけ

雅号ぶっちゃけばなし（136）

てい じ



吉岡逓児

よしおか

昭和十四年川柳入門、当時の号を笑々と言いました。十七年正月となり前年十二月八日より始まった大東亜戦はいよいよ拡大の方向へと延び、笑々なる号は戦時体制下に好ましからず、と某先輩から改号せよとの勧告を受けました。たまたま当時の逓信省の小吏でありました関係で即刻逓信省の逓を頂き逓児と改めました。因みに逓の字句は次第にとか順々にとか段々にとかの意味を有するとかで、計らずも私の人間性に相通うものを感じました。川柳人の号としては味もそっ気もないと思召す方々は多いと思いますが、私は私なりに由緒ある号として今後も活かしたいと思つています。逓児に改号以来三十余年、さして華麗さもなく今日に及びましたが号の字句に背くことなく一歩一歩徐々に、分相応に、着実に段数を昇る希いを込め例え頂きを極め得ないまでも、号にもとることなく、号に恥ない精進をと、ぶっちゃけばなしを結びます。

職業・商店経営　大正十三年十一月二十八日（五十歳）

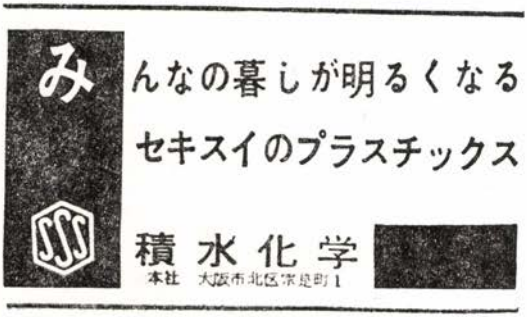
第二百八十二回（四十九年度最終回）

大萬川柳

「締める」入選発表

選者　川村好郎
投句総数　四百十句
入選　五十三句

締めくくりついたか事務所灯消え　大阪　誓二
引き締めるだけの政治がまごつかせ　堺　一舟
女の城心の窓も締め込んだ　大阪　凡九郎
ゆるめたり締めたり妻の持つ手綱　倉敷　梁水
ほら吹いた手前サイフは締められず　貝塚　つき子
逢いに行く帯締め一本にも迷い　大洲　暁明
再値上げ財布と心締める主婦　大阪　一栄
岩田帯締めて妻の座確かなり　呉　英詩
子の躾手綱しめたりゆるめたり　愛媛　悠泉
ネジなんぼ締めても土台がゆるんでる　宝塚　静馬
ふるさとの土で人生締めくくる　兵庫　可住
税務署に締め直されている喜劇　堺　天笑
締切りの扉社訓が媒けている
家計簿を締めて夫へ向き直り　大阪　十止庵
順風満帆へ心の手綱ひき締める
開発へ戸締りの要る村となり　大阪　柳宏子
やんわりと姑は言葉の裏で締め
記念の日愛の絆を締め直し　神戸　静泉
戸締りのいらない村の住み心地
日曜大工締めているこわしてる　岡山　翁童
ネクタイを締めて働く貌になる
締め切ってトントンという帳簿尻　門真　鉄児
正論が締出し食った多数決
窓締めて誰に遠慮のないふたり　尼崎　利美
再起するネジを夫婦で締め直し
引き締めの余波を下請けひっかぶり　鳥取　洋々
愛憎の果ては自分をしめくくる
一札をとって隋性をしめくくる　富田林　花梢
締めくくる家計へローンがひっかかり
これからはひとりの女で鍵締める
部分品締め直して出る師走
ドア締めてから女の歴史かえられる　八尾　弥生
名月をも一度ほめて戸を締める
今月も赤字繰り越す帳簿締め
喰い下る権利鉢巻締め直し　松江　晃男
佳句
しめ切った女ひとりへすきま風　堺　天笑
重厚な音で締った空金庫　倉敷　里風
色々とあったが笑顔で締めくくり　和歌山　としよ



仕事にはせぬ鉢巻をストに締め　大阪　貞祐

引き締めの家計をゆするコマーシャル　倉敷　素身郎

人ノ句

締め切った家計簿あんたどうする気　門真　鉄児

地ノ句

元栓を締めてエプロンやっと取り　大阪　文秋

天ノ句

靴の紐また締め直す遠い道　倉敷　梁水

選者吟

ともかくも手形で今年をしめくくり

昭和四十九年度

ベストテン決定

梅里賞

一　**藤岡　花梢**　二三・五　富田林

準梅里賞

二　**阪上十止庵**　二三・五　大阪

準梅里賞

三　**河内　天笑**　二三・五　堺

四　**宮西　弥生**　二〇・〇　八尾

五　**松下　梁水**　一八・五　倉敷

六　**本多　柳志**　一七・五　大阪

七　**金井　文秋**　一七・五　大阪

八　**傍島　静馬**　一七・〇　宝塚

九　**神谷凡九郎**　一七・〇　大阪

一〇　**佐々木静泉**　一六・五　神戸

敢闘賞

一一　野坂つき子　一五・〇　貝塚

敢闘賞

一二　西田柳宏子　一五・〇　大阪

一三　遠山　可住　一四・五　兵庫

一四　月原　宵明　一四・五　今治

一五　笠原　吸江　一四・五　藤井寺

一六　米沢　暁明　一三・五　大洲

一七　玉置　重人　一二・五　松原

一八　福島　鉄児　一二・〇　門真

一九　中川　晃男　一二・〇　松江

二〇　仲　どんたく　一二・〇　神戸

二一　城　一舟　一一・五　堺

二二　嘉数千代香　一一・〇　岡山

二三　吉野　富江　一一・〇　和歌山

二四　宮尾あいき　一〇・〇　大阪

二五　和田維久子　一〇・〇　富田林

二六　野田素身郎　一〇・〇　倉敷

以下略

昭和五十年度第二回

「タイミング」　五句以内

締切　一月二十日

第三回

「壁」　五句以内

締切　二月二十日

投句先

〒593　堺市堀上緑町一の三の七

藤井一二三方　**大萬川柳係**

第二十二回大萬川柳大会

日時　昭和五十年二月十六日（日）午後一時

会場　大　萬（大阪市阿倍野区松崎町三丁目）

会費　三百円

司会　西尾　栞

開会の辞　若本多久志

柳話　中島生々庵

昭和四十九年度

ベストテン表彰

兼題「指」　藤岡　花梢選

「手頃」　阪上十止庵選

「先手」　河内　天笑選

「愛人」　宮西　弥生選

「根性」　松下　梁水選

席題　二題（当日発表）

選者　本多柳志・金井文秋

（各題三句）

閉会の辞　菊沢小松園

ベストテンご招待懇親宴

投句のみの方は二百円。（郵券可）各題別に柳箋または便箋に記載の上二月十日までに左記へ送って下さい。

〒562　高石市高師浜三の五の六

川村好郎

主催　**大萬川柳会**

後援　**川柳塔社**

柳界展望

（原稿締切毎月末）

▼日本川柳協会創立総会が49年12月1日名古屋観光会館で開かれた。生々庵主幹と鬼遊氏が出席、盛会だった。同月14日午後二時から宗右衛門町〝明陽軒〟で開かれた日川協の常任理事会へ生々庵主幹出席。

▼「弓削川柳社・浜野奇童会長」が49年10月6日久米南町長から文化功労団体として表彰された。

▼「川柳なごや」11月号は40周年大会記念号（通巻426号）

▼「川柳さっぽろ」は11月号で二百号になる。札幌川柳社主催の全国誌上川柳大会入選作品を発表。

▼広島川柳会の第25回新年交歓36題川柳大会は一月十二日九時から―広島市西向島町、向島町民会館で開催

▼「番傘」の同人近詠の選者が一月号より平賀紅寿氏から金泉万楽氏に交代。榎本聡夢氏から奥山白虎氏に二月号より編集バトンがわたされる。

▼片山雲雀氏（瓦版主宰）は49年11月3日勲五等瑞宝章を授章された。

▼大野風太郎氏（柳都）が頭部手術のため「わたしの白石朝太郎」の発刊がおくれているとのこと。同誌へ執筆の岩本具里院氏「風土と川柳」は好読物。

▼林明春氏（ハワイ）のかつての日本語の教え児が州知事選挙で副知事になられた。

▼高木夢二郎氏（相模原市「川柳人」主幹）は49年11月8日（七十九歳）逝去。氏は剣花坊師の柳樽寺川柳会を守りつづけ今日に至っている。謹悼。なお48年度垂天賞は氏の作品―玉音放送あの日の暑さだつづき―が「川柳人」511号に発表。

▽同人誌△

▼『対流』第2号が〒170東京都豊島区北大塚一丁目三三―四、森林書房（山村祐）から発行。一行詩型研究／革新派にも伝統派にも好評。一部三百円〒五五円。

▽句集△

▼伊達南谷子著「川柳句集・笹鳴」が仙台市東八番丁一七〇（後藤閑人方）川柳宮城野社から発行。千二百円（送料150円）序文に高橋放浪児、後藤閑人。体裁共に第一級の句集。

▽同人の動向△

▼北川春巣氏（枚方市）は49年10月1日大阪中央病院へ入院、胃を手術され経過良好で11月22日退院された。句集「聴診器」が退院祝いとなった。

▼若本多久志氏（西宮市）相変らず「けいさつの友」へ川柳漫筆を執筆、好評である。

▼横山一声氏（岡山県）は49年11月14日岡山県庁で吉永川柳社が表彰され、その代表として出席された。

▼永宗宗義氏（岡山県）から句集「高瀬舟」を百冊、本誌発展費としてご寄贈いただいた。

▼浜野奇童氏（岡山県）49年11月22日から二泊三日大阪で教育研究会があり夫人と共に中小企業文化会館で秋田実先生の『ユーモアについて』の講演に感激。夫

永宗宗義
川柳句集
『高瀬舟』
頒価 300円
送料 70円

人と角座で寄席見物もされた。10月17日には広島放送局で「働哭」の中津泰人氏らと「川柳ひねれば」に出演、好評だった。

▼小出智子さん（大阪市）の遠縁にあたる京都市水尾の松尾氏方で南大阪川柳会の句会が開かれた。ここは〝ゆずの里〟として著名な所で、特に「ゆず湯」は好評だったと。

▼板垣草丘氏（出雲市）の新築祝賀句会が49年12月8日、出雲市大津町八五五の同氏宅で開催。

▼久米奈良子さん（東大阪市）は49年11月末「兵庫県立近代美術館」の一楽書芸院主催の書道展と、東大阪書道展にも出品、佳作賞を得られた。

▼八木千代さん（米子市）は十一月九日交通事故で入院されたが24日のお便りでは通院近しとのことである。—髪そっと梳く癒えかかる指添えて—千代。

▼恒松町紅氏（松江市）接骨のため再手術されたが49年12月中旬退院とのこと。

▼山田季賛氏（高槻市）は昨秋一応退院されたが食道静脈瘤で静養中。ご全快を祈る。

▼本田恵二朗氏（倉敷市）の母堂が九十一歳のご高齢で49年11月9日逝去。謹悼。—九十一年の灯がいま消える風もなく—一とすじの香煙天寿の像しずか—恵二朗。

▽旅信△

▼大矢十郎氏（新宮市）は香港から—従来でない香港の夜は楽し—十郎。

▼福田丁路氏（高槻市）はご夫婦で月の岬から—磯の香に煙樹が浜で酔いしれる—丁路。

▼森井菁居氏（竹原市）は奈良から—スケジュール狂わせ奈良の秋煙る—菁居。

▽一月の句会△

▼堺川柳会は十四日午後六時から—題「福引」「鏡」もう一題あり。会場は八木摩天郎居。

▼南海川柳会—十六日午後六時から—題は—開業・大げさ・慾目・会場は南海電鉄木社食堂内。

▼南大阪川柳会は二十日午後六時から—題「神話」「テキスト」「卓上」「手ほどき」会場は松崎町三丁目大万。

▼川柳東大阪は二十五日午後六時から—題は「兎」「紋付」「原点」「ボーズ」会場は東大阪市中央公民館第二集会室。

▼福島鉄児氏急逝（門真市—49年12月9日）享年六十六歳。桑副主幹がお通夜に—小松園、形水、与呂志諸氏や弓削から多数告別式に参列。合掌。



本社 十二月句会

会場　文化会館
七日　午後六時

ホームグランドが変わって会場へたどりつくのに相当時間がかかった方もいた。当分ここが会場になるのでご協力ねがいます。

柳誌の小松園氏は、もの知りとして「川柳雑誌」時代から有名だが、きようは現代の若者気質から地方の民話、または源氏物語の古典ものと多彩な内容だった。大阪市が企画した大阪史跡めぐりの遊歩道、氏が過ごされた玉造周辺のむかし話など興味深いがスペースがない。

今月の出席数は11月句会と同じだった。新年句会もこの会場なのでよろしくお願いします。

49年度納句会の月間賞杯は富田林の名花、藤岡花梢さんに輝いた。

進行・西田柳宏子―記録・高杉鬼遊

出席―○多久志・○庸佑・重人・○好一・水客・智子・滋雀・喜風・清人・○柳志・万作・冨江・○太茂津・○正彰・瓢太・○肖二・○綾女・○柳宏子・○葛城・柳太・花梢・○一三夫・○与呂志・古方・喜美子・○文秋・○雀踊子・維久子・一舟・百酒・形水・天笑・一扇・水京・つき子・○美幸・南柳・柳信・○吸江・三十四・誓二・眉水・○鶴声・英断・たかし・いわを・○牧人・○十止庵・夕花・凡九郎・○儀一・栞・○鬼遊・敏・亜純・草生・○静馬・川狂子・薫風・○岳人・勝晴・弥生・幸生・好郎・弘生・小松園・酔々・新之助・葉子。（○印23氏が49年度全出席）

席題「予　約」　神谷凡九郎選

予約席どんな二人が来るのやら　多久志
予約金お礼を言うて払わされ　いわを
明日もわからん人と人とが予約する　古方
キャンセルのつもりともかく予約する　花梢
会う予約要らぬ肩書捨てた朝　滋雀
予約せんと出るのがこの頃好きになり　古方
人生のエア・ポケットに待っていた予約　滋雀
割引の予約本に銭が無い　亜純
葬式の予約がしたい物価高　鬼遊
予約せぬ客が明日香に来てるスト　英断
予約までして歯医者にいじめられ　重人
予約した人生と知る冬の風　弘生
旅なれて予約もせずに飛び乗った一扇
痛い歯に予約せよとは無慈悲すぎ　喜風
俥せを賽銭箱に予約する　岳人
キャンセルを待って片恋生きつづけ　弘生
えらいこと予約したナア無関心　太茂津
予約して喧々相摩す湯につかり　静馬
集金が来てから予約思い出し　維久子
エリートの此処までの椅子予約され　百酒
予約から義理が湧き出る気の迷い　太茂津
墓地を買う予約へ夫婦して笑い　雀踊子
太陽を予約しました独り者　岳人
墓に朱を入れてエンマを待たしとき　弘生
予約したころは静かな山でした　十止庵
合理主義とかで不便な予約制　多久志
自分の心に小さな釘を打っておく　水客
幸せの予約そんなのないかいな　凡九郎

席題「同　情」　竹中肖二選

同情の目盛りにされる金の多寡　静馬
同情は受けて一線守りぬき　多久志
焼け跡の肩へ同情の手がぬくし　一三夫
同情へふと抵抗をする言葉　花梢
同情の底に蔑視が顔を出し　柳宏子
同情に甘え人間駄目になり　文秋
同情はするが先立つものがない　智子
同情の挨拶ほとほと聞きあきる　庸佑
同情のかけらが社会鍋の底　十止庵
同情はするが財布は開けられず　百酒
同情は無用私は私の道を行く　清人
反骨は他人の同情もよせつけず　好一
さりながら同情されて淋しがり　古方
同情へ素直になれぬのも業か　古方
同情は欲しいがめんつに意地を張り　正彰
同情の瞳をさらってる身障者　綾女
同情を嫌う義足のいかり肩　雀踊子
同情へ男虚勢の背を向ける　冨江
老いの目に善意の席が気に入らず　与呂志
同情へ精いっぱいの背を向ける　重人
同情を断る意地はまだ残し　柳志
ほっといてくれと同情寄せつけず　文秋

同情はするが規則は曲げられず　三十四
悪友の同情毒舌ありがたし　太茂津
同情でもろうた嫁にもう敷かれ　天笑
同情はしても財布はゆるめない　十止庵
同情にすがる心が許せない好一
同情をした野良犬に住み付かれ　儀一
同情がいつのまにやら恋になり　敏
同情に応えて魂入れかえる　たかし
「ご同情を」などと集めた票なのに　一三夫
同情の拍手も混じるカムバック　柳志
同情の言葉の尻をからまれる　肖二

席題「私鉄」　笠原　吸江選

乗り換えた私鉄故郷はもう間近　多久志
沿線案内私鉄もう正月の色になる　水客
初詣私鉄はどこも恵方にし　百酒
分譲地私鉄ストには触れていず　柳宏子
一方的にストも値上げもやる私鉄　眉水
すべり込む客も待ちます私鉄です　夕花
ターミナル赤字も詰めて出る私鉄　滋雀
優待券が欲しくて私鉄の株を持ち　牧人
乗り替えがてれこてれこになる私鉄　維久子
阪急と阪神百貨店でも競い　静馬
私鉄スト国鉄なみに旗を振り　花梢
国鉄の値上げまだかと待つ私鉄　多久志
おしぼりが旅情をさそう伊勢詣で　柳信
何でも屋私鉄の商魂たくましい　敏
一番の私鉄で降りた小商人　雀踊子
ストしない私鉄も便乗した値上げ　滋雀
測量に私鉄が来てから村が揺れ　百酒
優待券あるから私鉄まで歩き　庸佑
不景気をよそに私鉄の花だより　十止庵
方言の出る私鉄車掌の乗り心地　たかし
春が来る私鉄はストの準備する　牧人
沿線の地価国鉄を抜く私鉄　一三夫
私鉄スト日曜大工の腕ふるう　重人
乗車賃上げてもサービス元のまま　静馬
私鉄なら顔が聞くぜと票集め　儀一
私鉄スト欠伸の駅員睨まれる　与呂志
おしぼりを出して私鉄の乗り心地　喜美子
国鉄のストに私鉄もおどらされ　喜風
国鉄が上げれば私鉄北叟笑み　葛城
地代から電車賃まで取る私鉄　天笑
初もうで私鉄が切符売りにくる　花梢
私鉄では労働組合忍者めき　柳信
株主の優待券が乗るラッシュ　鬼遊
春闘の真打ちとなる私鉄スト　清人
駅長の手元危うし私鉄スト　柳志
デパートを持った私鉄にあるゆとり　一三夫
乗せる客住ませる家も私鉄建て　一舟
丸出しの大阪弁も私鉄らし　古方
住宅にゴルフも私鉄手を延ばし　三十四
私鉄商法こんなとこまで名所にし　静馬
大阪の私鉄は野球が好きとみえ　吸江

兼題「混線」　岩本雀踊子選

混線は黄色い波長に押さえられ　どんたく
混線の中に私の声がある　千万子
混線でかんじんなこと聞き洩らし　祥月
混線した話結局取り合わず　季賛
忘年会舌の混線つづくまま　一栄
混線をさすこんたんにひっかかり　庸佑
精進の汗混線にたじろがず　重人
混線でイエスを消したキュピット　弘生
混線の頭をほぐす迎え酒　肖二
混線を裁く親分かも知れぬ　十止庵
混線してまだ本心を聞き取れず　小松園
混線にダルマが汗をかきはじめ　重人
混線にゆだね妥協をたぐりよせ　滋雀

ご批判ください！参加二百五十五名の競作を！

川柳塔社
同人句集

『川柳塔』

価　一、五〇〇円
送　一六〇円

東野大八氏―立派な布張りの豪冊ぶりに愕きました。
岡田　甫氏―意外にも新鮮な句が多い。堂々たるものです。

発行所　〒542　大阪市南区鰻谷中之町二〇　川柳塔社
（振替口座　大阪・三三三六八番）

揚げ足を取られて混線する議会　勝晴
混線になりそうお勝手と言うにげ場　喜美子
美しい混線と知り電話切る　美幸
混線をさせるおんなは嘘を抱く　眉水
混線の世相で真実守りぬき　夕花
肝心な事混線で言い忘れ　つき子
混線の向うも大きな声となり　一三夫
混線に訳も判らず怒鳴られる　柳宏子
人生の混線一つずつほぐし　美幸
混線の電話に愛のリズム聞く　正彰
混線のもとは社長の早合点　庸佑
この電話混線しとる酔うている　一三夫
混線をして人間の生きる街　酔々
混線の脳細胞が阿呆になる　雀踊子

兼題「崩れる」　小浜　牧人選

団結が世帯持ちから崩れ出し　どんたく
信頼の崩れたもとは金のこと　柳信
インフレへ積木音なく崩れゆく　一栄
崩される土手とも知らず草は萠え　あいき
思惑が崩れましてと借りに来る　吸江
おでん鍋崩れたままの味を賞め　柳志
崩れそうな家で家賃が上げられず　文秋
故郷の山は企業に持ち去られ　一舟
一と皮を剝げば崩れていく虚像　百酒
崩れたらまだ積み上げる土性骨　滋雀
崩れると見せてマダムのテクニック　敏
崩れないように積木も知恵がつき　文秋
耐え忍ぶ心のせきが崩れかけ　好一
積むよりも崩す積木を嬉しがり　柳宏子
廿言に崩れる女のさが哀し　勝晴
価くずれへ社長強気で訓示する　柳太
生活の崩れをかくす派手好み　綾女
春の山雪崩の音はこだまする　いわを
相好を崩して孫を抱く男　智子
崩すなら崩せとボディビル励む　古方
貧しさに崩れぬ母の手内職　維久子
一万円崩して何を買うたやら　葛城
崩れても崩れても砂は生きている　一三夫
一球が失投となり崩れさる　亜鈍
煩悩無尽崩れ去るもの崩れ去る　古方
崩れても自分を生かす欲は持ち　小松園
茶碗酒崩れた夢が浮んでる　宗義
なだれきて賢女の稼ぎは細くなる　鬼遊
五十年よくも崩れずきた夫婦　静馬
正論が崩れる夜のにがい酒　与呂志
友達でいたいと女崩れない　福水
欲望の果てに崩れた虹をみる　滋雀
この愛を崩すと眠れるかも知れぬ　智子
乾杯に男の意地が崩れそう　岳人
崩れても女は笑うのをやめぬ　十止庵
言い負けて風に崩れる雲となる　美幸
昼の月崩れるおんな見てしまい　岳人
三日目にもう決心が崩れかけ　柳志
小さな愛が崩れて路傍の石となる　智子
崩れゆく心へ喪服の襟ただす　万作
崩れても男は石を積む運命　十止庵
信念を崩してならぬ神詣で　肖二
ともすれば崩れたい気の血がさわぐ　〆女
蟻登る砂崩れても崩れても　葛城
崩れてもばらにはばらの誇もつ　維久子
足許の崩れぬうちに抗を打つ　好一
崩れ落つ心の音は聞かすまい　凡九郎
力つきて独楽はバランスが崩れ　牧人

兼題「追伸」　西　いわを選

追伸に必ず待つとクラス会　一栄
追伸でさらりと度胆抜かされる　柳信
追伸に僕のプランも書きそえる　季賛
追伸をきれいに結ぶ五七五　祥月
追伸の孫のカタカナ先に読み　あいき
追伸に心の底をうち明ける　どんたく
追伸に旅の一句を小さく書き　肖二
追伸にちょっぴりすねたペンの跡　万作
追伸のまだ書き足らず恋進む　滋雀
追伸に追伸がいる金のこと　一三夫
追伸で個性のぞかす願いごと　柳信
印押してから追伸に念を入れ　弥生
追伸に一句も添える旅便り　好一
ひと息を入れて追伸の位置をきめ　古方
奥様へついでながらという追伸　多久志
追伸になって二度目の念を押し　文秋
追伸は鉛筆母からの包み　三十四
追伸が暗号めいているふたり　天笑
今切った電話笑うて掛けてくる　水客
追伸に気になることが添えてある　吸江
追伸が無ければ何でもない手紙　庸佑
追伸にちょっと泣かせることも書き　多久志
追伸へきて本当に恋が言え　鬼遊
追面書によろしく女房の筆不精　静馬
追伸の中できれいに断られ　柳志
追伸は鉛筆書きとなるあせり　岳人
追伸は母の香匂うよもぎ餅　〆女

急ぐので返事は電話でしてほしい　亜鈍
追伸へ暗号だけでわかる仲　柳太
追伸に友情滲む年賀状　万作
肝腎のこと追伸で故郷の母　柳宏子
追伸にはだかの願い書いている　維久子
くどくどと書いて二伸へまだ続き　葛城
追伸に心満たして女足る　喜風
追伸に書きましたけどと電話来る　一扇
追伸へ押花入れて郷里の母　冨江
追伸の方へ本心見せており　小松園
追伸へ忘れた頃の礼も書き　好一
追伸の金釘流は母の文字　美幸
追伸のたった二行に用があり　天笑
追伸のそこへ赤マルつけておく　古方
追伸の方が本文よりながい　川狂子
追伸にチョッピリ結婚したと書き　水京
追伸は鰯の季節と書き添える　水客
本文で謝り追伸で深く詫び　栞
追伸で軽くことわる無心状　十止庵
追伸にちらり本心覗かせる　天笑
本心は追伸にある下心　英断
追伸がはがきの表までまわり　文秋
長崎で待てと追伸囲碁の友　一舟
追伸が絶筆となる葉書抱く　美幸
追伸へほろりとさせることを書き　いわを

兼題「見　学」　大坂　形水選

見学はそこそこにして宴の席　どんたく
見学のかえりその社の半端買い　千万子
見学の客へ忘れぬコマーシャル　宗義
見学へ趣味のちがった親子の目　祥月
見学のあとの道ぐさ楽しみに　一栄
見学は再教育でシゴかれる　没食子
スタジオを見学に行く服を買い　あいき
見学はここで打切る俄雨　酔々
主婦の会見学うるさいことを聞き　牧人
見学へ末っ子ここの社員なり　雀蘭子
見学にスパイのような眼の光り　鶴声
見学の眼を憎んでる施設の子　葛城
自衛艦見学軍艦マーチ聞かまほし　水客
見学へ撮影禁止という商魂　多久志
見学へ社のコマーシャルしつこ過ぎ　儀一
見学へ団地夫人のバスが派手　一三夫
レポートに夜の見学書いてない　静馬
土産物貰えば見学用がない　静馬
見学のコースに哀史かくされる　重人
見学の前で機械が故障する　小松園
見学団尻目に鰯は動かない　酔々
見学へロクロの男無口なり　鬼遊
見学で聞けば公害出ぬ仕組み　百酒
蛇の道はヘビ見学の目が光り　つき子
見学はゾロゾロとついて行き　瓢太
見学の一人のぞけばみなのぞき　栞
見学をしてから端株売りに出し　十止庵
見学の度が過ぎ夜へおちてゆき　つき子
自費で来た見学だけに熱が入り　天笑
見学にきて辛辣なことを言う　瓢太
見学のコースを外した研究所　清人
施設見学やがては母となる重み　花梢
ヘルメット要る見学に身が緊まる　形水

（河井庸佑・整理）

大萬川柳会
どんぐり川柳会
まるべに川柳会
あすなろ川柳会

本年もよろしく
ご指導のほどを

明けましておめでとうございます

季節料理・折詰

大萬

大阪市阿倍野区松崎町
TEL (623) 5031・5032
南区畳屋町三ツ寺センター
TEL (211) 9184

名地物望

▼かならず原稿用紙にペン書きで文字は楷書。締切毎月末着便まで。21行以内。書式は発表誌のように下三マスに雅号。

川柳大阪　児島与呂志報

もしやもしやとPCBの恐怖症　誓二
灰皿に今朝の怒りを曲げたまま　六竜子
平和の鳩を貨物駅はもて余し　季賛
狙っても狙っても大きな夢また外れ　喜酔
別室に呼ばれ鼻にだきつかれ　三十四
台風もそれて愈々天高し　胡蝶
吉報を待つ灰皿が溢れてる　道子
鼻声は西鶴五人女にも　眉水
鼻声も知らず女の強く生き　笑風
さりげなく冗談交す深い仲　徹舟
多数決ひとつの暴力かも知れず　重人
啄木にひょっこり会いそな砂の浜　本蔭棒
生じっか札びら切って狙われる　楽々
鼻声の効果ガラスが金剛石　漁人
沈没をしそう一億狭い国　洛酔
みごもった女いばって歩いてる　敏
初恋は炎えたと銀婚のろけてる　秀峰
何も彼も知っていながら聞く女　鶴丸
とことんの処まであまあまあと酒　与呂志

オーエスケー川柳会　大坂　形水選

祝辞の服装へ娘のアドバイス　元二
祝辞にも政治の話が含まれて　秀川
ファッション横目でにらんで通りすぎ　幸太郎
消費者にふり手わされているファッション　亜成
家庭不和の人が堂々と愛の祝辞　栄
盛り場をさまよっただけの夜長　有一
秋の夜をテレビで終る良い夫　常夢
お祝辞を読んで涙があふれ出る　まがき
祝辞でも心とは遠いことを言い　中野
立読みの出来る場所で待ち合せ　一扇
よめばよむほどくだらないのが週刊誌　聖地
老いてなおファッションブックに目を通し　博泉
親心祝辞の如く生きてくれ　駒村
とつ弁も心に残る良い祝辞　前田
母と娘の噛み合ぬまま夜長　千夢
経を読む女に涙乾いてる　弥生
田舎でも銀座に負けぬファッション　形水
代読の祝辞へ不足そうに立ち　入仙
うちの人まだ帰ってこぬ夜長　好郎

川柳ささやま　河原みのる報

要点はメモに残した酔い心地　とおる
要点になったところでコマーシャル　喜美代
要点を働く切り札を出しそびれ　とんぼ
要点を云わんかいナと会議遅々　八陣
要点がズバリ琴線鼓動さす　素水
タレントの素顔は妻としてのもの　可住
タレントの風が吹いてる首長選　緑村
当選の元はといえば歌まつり　秀峰
還暦の貰った餅に骨があり　千代子
骨のある飯に堪え来た深い椅子　百合子
真っ白に刑死の骨の清らかな　みのる
笑わせるタレント陰でネタに泣き　近江
失恋のそれから日記白いまま　越山
過去は過去白紙となって角かくし　よしの
白紙にして呉れへ腹の子承知せず　宗珠
左前ああ夕月は変りなく　をさむ
近々に行くとは無心の事らしい　無鬼

ハワイ川柳ウイロー社　林　蒼蛇楼報

あれば邪魔焼くには惜しい古書物　拝山
その先を書けば傷つく人がある　峯円
余白へも何か書きたい筆達者　暁舟
書ける手を持って書かない筆不精　カロ
必勝を期す寄せ書きの字が躍り　風影
人格がにじみ出ている筆の跡　稠雄
かなだけの母の手紙に動かされ　北海
書留の金に意見も添えて来た　細民
親展をあけてがっかり請求書　快夢起
言い訳も書けぬ不義理の過去があり　草海
書道展筆のカスれもほめておき　万里歩
遺言状弁護士の手に集まる眼　蒼蛇楼
サインして家も屋敷も持取られ　翠峯
肩書で座布団の位置定められ　河舟
文通を続けた友が又も逝き　椰子郎
扇子にも忠と染めてる明治っ子　一ッ葉
妓の名前そっと書いとくマッチ箱　三石
お家流母の手紙に一苦労　雪女
有難や文書けとてか今朝の雨　公女
お礼書く気力も出ないなさけなさ　エス子
道風をまねて古稀でも書を習い　伯実
お正月書き初めをした日の恋し　小雪

菜の花句会　鬼遊報

武器にする積りで女のつけぼくろ　幸生
娘の夢はガラスの靴の王子さま　水京

他人の夢ばかりが落ちていた酒場　十止庵
湯上りの人妻盗むスリ硝子　美幸
立飲みの裾を野良犬嗅ぎにくる　牧人
受話器をとればガチンと切られたり　凡九郎
裾模様目出度い訳が書いてある　岳人
ガラス越し魚のキッスなら許す　鬼遊
自己愛が深くてガラス破られず　百子
言いのがれ出来ぬ決め手となるほくろ　頂留子
天宇受売が笑いぼくろをつけて来た　酔々
間違うた電話注文受けて詫き　儀一
ご苦労を重ねた母の深い皺　喜風
悪魔除けほくろの位置も替えて見る　鶴声
ガラス越し蒲団の柄は花模様　小松園
受話器を取るとベルは安心し　鎮彦
窓ガラス割った一人が逃げおくれ　史子
硝子ばり所詮は無理な暮らしむき　紀美代
ガラス切る一直線の音さやか　鹿蔵
硝子越し陽はさんさんと猫眠る　徳治

吉永川柳社（岡山県）　平井三与子報

病む窓へ日毎にもえるつたもみじ　伊久野
無役とは気楽はっきり物が云え　浄美
日曜の投票保守には不利な雨　飴ン坊
仲人の目には承諾したと見え　芳月
年毎に月見る心変って来　柳子
性格は変らず年をとっただけ　正州
日曜日僕には頼りの防波堤　清春
義理で来ただけの素振りはすぐわかり　秋月
日曜のパパを抜いた悪い客　恵美子
仲人もあの一と言は教えかね　暉生
島の娘の恋秋風の浜に消え　一声
デートの娘知らぬ素振りで帰って来　水仙
歩かねば後がつかえる細い道　武夫
あの人に秘密話せぬ後ろ指　晴堂
性格がまた一と言を言い過ぎる　宗義
性格を知っているから座を外し　久来雄

タイミングよいライターの火にあわて　胡風

駒つなぎ句会　岸南柳報

運動会風も一しょにおどってる　昌美
産声に苦しさ取れてねむ気さす　茂子
産声のたびギョットする子沢山　石捨
産声を聞いて父かと自信なし　規一朗
産声をあげてしっかり主張する　鎮彦
産声に里のばあやの嬉れし泣き　南柳
世間にもよくある事と許される　綾女
世間から聖者と云われ恋もせず　眉水
広い世間誰かに当る宝くじ　恭太
わかったと云っても世間ごまかせず　はやを
年配が世間知らずに押し切られ　儀一
世間から見れば俺でも羨やまれ　肖二
邂逅の電話世間はせまいもの　多津緒
物価高世間ばなしですまされず　育園
世間悪気にするうちは困ってず　柳信
口笛を吹くに世間暗らすぎる　美代
どん底の世間にあった温かさ　宏子
世間でも云うてまっせと樋を突き　摩天郎
よい器量世間知らずにしておかず　小松園

まるべに川柳会（大阪市）　村田瓢太報

同窓会また常連が一人かけ　扇里
鯉の動き日々にぶりて深む秋　貞子
ため息がもれた美人の晴れ姿　寿子
満腹になって体重気にしだし　一世
金なんてそれでもやはり金を溜め　幸子
不景気の中で儲けて疑われ　茂児
インフレの秋空だけがやけに澄み　立児
外でよし内でもうまし秋の酒　好郎
小細工をし過ぎかえってボロを出し　瓢太

川柳たけはら　森井菩居報

思い出の道踏みしめて露光る　松緑
灯を消して私一人の秋の夜　鬼焼
日曜があり日曜が休めない　静水
あたたかい友の土産の二重焼　房子
自惚れてひがんでそれでよしとする　蘭幸
なき人の好物なるか墓碑の梨　東光
食欲の秋を物価にいじめられ　そのみ
こわいけどのっちゃうゼットコースター　愛
採算と別に稲穂を見てあかぬ　菩居
秋深く命尊きものと知る　笑子
秋の酒しみじみ人を恋うる夜　文晴
試歩の足の裏から清水湧くごとし　不朽
梵暗に深く眠れよ彼岸花　紫光
秋の陽を浴びて蝶々舞い納め　一路
やみくもの寡笛隋性の壺の中　のばら
お彼岸へお餅の好きな母だった　貞子
待つ人もなくたそがれの色を恋い　かつ子
高卒の長女を雇う社を調べ　英詩
なるようにならせておけぬ反抗期　西合
病人に逆ろうて見ても始まらず　スミ子

和歌山短詩型文学クラブ　中筋三幸報

佳句地10選（前月号から）

板垣草丘選

ドタバタとあらかた過ぎた世を惜しむ　里美
奇型魚を逃して末を不安がり　河南
寝返りの駒が先頭で攻めてくる　凡九郎
点灯も気付かず我を忘れてる　武雄
汐のひくのがわかる黄昏の海が好き　和友
境内を横切るだけの市場籠　吸江
自惚れが消えれば波に流される　一路
弟をかばう嘘ならとがめまい　綾女
仏像のメッキがはげて親しまれ　柳志
生かされて生きる感謝の灯をともし　静歩

叱られて飛び出す夜の星無数　知也
どの道も勝負の世界プロがいる　勇次
パパイヤの味に異国という情緒　光治
こんな時叱って欲しい継母を見る　政夫
友情の絆送って来たりんご　富子
人間の欲は寫まで闘わせ　ふく代
叱り声だんだん出てくる国訛り　昭夫
みかんむく死病の爪の透とおり　其夕
人前で叱って俄かに行儀つけ　平雄
勝負事好きな課長で世話も好き　三幸

城北明朗句会　川口弘生報

尋ねると理学士知らぬ事ばかり　春巣
履歴書の一行姉の世話に成り　牧人
留任へ責任のない拍手する　十止庵
酔う程に父は音痴のリバイバル　小路
理屈では親よりうわて反抗期　繁子
流行語係に飜訳してもらい　満津子
理解した筈がどこかで喰い違い　鉄児
伸びきったヘチマの影も秋になり　ますえ
小金出来利息に強い妻となり　柳信
永遠に陸軍一等兵の墓　右近
流暢に喋って誠意を疑われ　百酒
停年近く理想大きく変更す　三十四
不景気の贈料理屋から流れ　弘生
こんな離島へも電波にのってC・M　誓二
呼鈴の今日はどうでも貰うはら　静歩
理屈抜き故里いつもなつかしい　濁水
風鈴も秋風吹けば耳ざわり　つね
りんきしてあとで思えば馬鹿をみた　駒子
曽孫を抱いて美人の腰を見る　生仏

南大阪川柳会　金井文秋報

あとけない口でも損なこと云わず　恒明
その口を開けなきゃ可愛い女やで　凡九郎
行き倒れ見過す心俺も持ち　一舟
真心が弁当箱に詰めてある　牧人

良心が金の重味に眼をつむり　好一
寄って集って吉日出度い物にする　小松園
千万の味方より吉相の強味抱く　君子
断崖の危機は足から抜けた風　滋雀
断ち切った過去がくすくす嗤い出す　智子
断片の愛を拾って僕は生き　茂
現実に傷つく人が藤にいる　千万子
雄芯と雌芯めしべ実のなる用意して　古方
真実を神にあずけてじっと待ち　酔々
三代目常に格言抱いている　静香
デザインを一寸いらって格上げす　形水
格下げを納得させる使者となる　庸佑
銭は持ちたいもの別格に扱われ　誓二
合格のそれから母は無信心　喜風
格式の無い家にある笑い声　鎮彦
人格のないステコの夏涼し　十止庵

川柳東大阪　竹中肖二報

嬉しさについ飛んで出た本音　好一
つい本音出そうで盃ふせちまい　綾女
本音出たのでややこしうなってくる　古方
アンバランスな恋札束に支えられ　十止庵
バランスを崩して散った星屑か　肖二
バランスが崩れ踏絵は裏がえる　酔々
バランスを崩す女にあるルージュ　柳信
真中に子がいてバランス保たれる　静香
控え目な一家バランスうまくとれ　喜風
提灯と釣鐘バランスとれて老い　美幸
さぐられてさぐって社宅住みにくし　思月
さぐられているのを知っている笑顔　鎮彦
コツコツと刑事がさぐる点と線　水京
探られているとは知らずよく喋べり　儀一
セコンドも兼たタオル投げこまれ　柳宏子
傷心へ易者みかねて吉を出し　三十四
無精者さつきもろうて来て枯らし　文秋
無精者が精勤になる昇給前　季賛

借金のとき筆無精飛んでくる　太茂津
妻が来て無精のくせが一つふえ　あいき
囲い破れてヒケはジリジリ後ずさり　誓二

南海電鉄川柳会（大阪市）辻圭水報

信号のない陸橋を嫌う年齢　鎮彦
信号に見知らぬ人の情見る　清女
信号の変りきるまで待つお年齢　圭水

渡る気がないのに信号赤となり　小松園
妻のめくばせ友引きとめるのをやめる　綾女
信号の事故足べたの目撃者　儀一
蔭日向ない真夜中の信号機　柳信
信号でぽんと呼ばれてふり返り　摩天郎
さいさきを青信号にみとどける　宏子
酔うているから渡られた赤信号　和郎
終電を見送り信号青で立ち　保夫
信号の対角線が紛わし　肖二
シグナルとレール運転席の窓　十止庵

京都塔の会　松川

お遍路の笠がつづいている札所　飛鳥
笠の位置変らず落柿舎は雨　和友
遍路笠字もうすらいで来た土佐路　誠史
三度笠とり故郷へ礼を云い　三求
竹ベラで掘って歴史の嘘あばく　英断
えとの絵を暮のさ中に掘りつづけ　蘇明
風鈴へ夏の思い出しまい込む　堂
旅笠で新三出そうな木曽祭り　珠代
笛　杜的報

笠踊り観光コースで見せてくれ　季賛
陣笠へ最高点の浮動票　求芽
石仏との対話歴史のかげをみる　水客
富嶽三十六景笠雲の富士が好き　杜的

高知川柳社（高知市）　川竹松風報

捨て石の役がだんだん見えてくる　其梅
コップ酒今日一日の憂さを捨て　たかし
浦戸湾命を捨てる橋でなし　春水
また一つ夢捨てさせる物価高　みつ子
外灯の一つは村の駐在所　十面子
外灯が二重三重酔ってます　香芳
外灯に霧が流れるターミナル　春郷
台風が来る外灯に虫の群　陶酔
応援を旅館に封じ込めた雨　たけし
雨だれのリズムを夢の中で聞き　美知
平でいる先輩だから打ち明ける　海一州
落暉の影がベンチで動かない　悲窓
稔りよし嫁の晴着へ更ける針　花
鍵っ子が外灯の元母を待つ　勝子

街の灯へ一人歩きの足が向き　信次
人形が歩いて夢を見失い　紅雨
豊作の畦に真赤な曼珠沙華　紀人
豊作を嫁いだ娘取りに来る　松風
豊作のおいもへカン声保育の子　寛

丸文川柳会　竹内　翁童報

セールスの腕で買わせた口車　玉仙
グリン車はにわか仕立ての顔で乗る　黒山
タクシーのうわさに乗った旅の夜　万美
紘の音にのって名取りの舞扇　春日
子の握るむすびを喰べて妻を待ち　芳仙
握られて勘が働く胸算用　黙生
教授さんうらで握るか家が建ち　観月
握ってるつもりの幸せにある不安　翁童
初夢の天皇握手を求められ　将雪
初釜の杓もつOLに吾娘思い　健山

▼**西田柳宏子氏**―社用で九州筑豊に来ています。―ボタ山の哀歓緑に包まれる―柳宏子

・ペンペン草・

★あけましておめでとうございます。

★東野大八氏が意欲作「麻生路郎物語」を今年いっぱい、あるいはそれ以上になるかも知れないが、意欲のわくまま書きつづけてくださることになった。各方面から取材し、書き上げた原稿は麻生磯次女史に一度を目を通していただき、その後、編集部へ回わされるといった慎重さである。この熱気はらむ好読物が本年の話題をかっさらうであろうことを皆さんと共に期待したい。

★ぼくもこんど柄にもなく川柳の原稿を「上方芸能」編集部から頼まれたが、大正時代の大阪の川柳と笑いがテーマだった。そこでまず明治四十二年四月に死んだ自称天才小島六厘坊氏を出来得るかぎり知りたかった。だが本誌の校正中で締切日に追われ不本意なものになってしまった。

★小島六厘坊は二十二歳でこの世を去ったが、大阪の川柳界をリードするの気慨をたきらせたという。彼がかりに現在生きていたとしたら、果たして若い彼についていけたかどうか。路郎先生は三十歳そこそこですでに柳界一方の雄だった。

★岸本水府先生が番傘創刊号で編集兼発行人となっているが、二十一歳のときだときいた。

★むかしは若い人もエラかったのだろうが、それを育てる周囲もエラかった。

★本誌の編集部へヤングパワーの注入ということで若手作家にはいってもらった。

▼**葉子コーナー**

▼おめでとうございます―本年もよろしくご指導のほどを。

▼都心をはなれた柏原市は、心斎橋の編集室より三、四度は寒いので朝がつらいです。北海道の冬はもっと寒いのですが、暖房が行き届いているせいか、室内にいると、いつも春心なのです。

▼わたしたちの居室番号が変わりました。B417になりました。

が、みんな五十歳前後である。五十代が若手だなんて川柳界はヘンなところである。

★「川柳界」は「老人界」とあきらめているものの、やっぱりわびしい。テレビの歌謡番組や、若者がたむろする喫茶店などにも接しているが、せいぜい数年ぐらいより若返えられないことを近頃になり、やっとわかったことである。―わびしいデスなア。

★年賀広告ありがとうございました。

（不二田一三夫）

本社新春句会

日時　一月七日（火）午後六時
会場　大阪府中小企業文化会館（二階二一号室）
天王寺区上汐町五丁目二五番地・地下鉄谷町九丁目下車南三百米・電話七七一―四〇九六
あいさつ　中島生々庵
柳話　川村好郎

☆短冊交換会（一人三点以内）
☆四十九年度月間賞杯授与と全出席者表彰

兼題　「始発」正本水客選
「跳ねる」菊沢小松園選
「賀状」若本多久志選
「祭り」西尾栞選

席題　各題三句以内厳守
会費　二百円　当日発表

★投句だけの方は切手百円封入

★電話での投句や訂正はご遠慮願います
大阪市南区鰻谷中之町20
川柳塔社

2月の兼題　「パズル」「恵方」「焦点」「聴診器」

会場は2階21号室

募集

三月号発表（1月15日締切）

川柳塔（10句）中島生々庵選
水煙抄（10句）川村好郎選
課題吟（各題5句以内）
「勧誘」藤村〆女選
「ネジ」西出一栄選
「帯」高橋操子選

四月号発表（2月15日締切）

川柳塔（10句）西尾栞選
水煙抄（10句）菊沢小松園選
課題吟（各題5句以内）
「PTA」小出智子選
「廿茶」久家代仕男選
「歩道」長野文庫選

★原稿は四百字詰原稿用紙に四枚以内。文字は楷書で新かなづかいにしてください。
★川柳塔欄の投句は本社同人に限ります。
★用紙はなるべく柳葉をご使用ください。

12月号は11月30日発送しました

定価三百円（送料十六円）
半年分　千八百五十円（送料共）
一年分　三千六百円（送料共）
昭和四十九年十二月二十五日印刷
昭和五十年一月一日発行
編集兼発行人　大阪市南区鰻谷中之町二〇番地　中島蓬太郎
印刷所　大阪市南区鰻谷中之町二〇番地　藤原童心社
郵便番号　542
発行所　大阪市南区鰻谷中之町二〇番地　川柳塔社
電話大阪・二七一―三九八五番
振替口座　大阪・三三三六八番



乗用車専門販売店

NISSAN

尼崎日産自動車株式会社

取締役会長 若本真彦

〒661 尼崎市尾浜町2丁目3番27号 電話(06)429—5861(大代)

事業所名	郵便番号	所在地	電話番号
尼崎営業所	(661)	尼崎市尾浜町2—3—27	大阪(06)429—5861(大代)
尼崎中古車ギャラリー	(661)	尼崎市大西町3—8—20	大阪(06)426—3751(代)
伊丹中古車ギャラリー	(664)	伊丹市千僧2—6	伊丹(0727)79—3961(代)
宝塚営業所	(665)	宝塚市旭町3—2—6	宝塚(0797)84—2300(代)
西宮営業所	(663)	西宮市下大市東町11	西宮(0798)52—1121(代)
西宮中古車ギャラリー	(663)	西宮市若山町78—1	西宮(0798)65—3963(代)
神戸営業所	(653)	神戸市長田区2番町4—2—1	神戸(078)577—0223(代)
西脇出張所	(677)	西脇市寺内492—1	西脇(07952)2—4152(代)
淡路出張所	(656)	洲本市下加茂1-1-86(辰岡ビル1F)	洲本(07992)2—7353(代)
垂水出張所	(673)	神戸市垂水区伊川谷潤和有久1136-1	伊川谷(0789)74—2781(代)
神戸サービス工場	(652)	神戸市兵庫区小河通8—5—2	神戸(078)575—5256(代)
灘中古車ギャラリー	(657)	神戸市灘区岸地通5—3	神戸(078)801—5111(代)
明石営業所	(673)	明石市船上硯町2—1—10	明石(078)923—0234(代)
篠山営業所	(669-21)	多紀郡丹南町牛ケ瀬29	丹南(07959)4—1171(代)
篠山中古車センター	(669-23)	多紀郡篠山町郡家田中の坪842	篠山(07955)2—0603(代)
姫路営業所	(671-02)	姫路市御国野町国分寺56—1	姫路(0792)52—4181(代)
三田営業所	(669-13)	三田市新土1610—1	三田(07956)2—6501(代)
加古川営業所	(675-01)	加古川市平岡町高畑537—1	加古川(0794)23—3144(代)

あたたかいご家庭へ、あたたかいおみやげ！

豚饅
焼売
焼餃子
豚まんの王様、やき豚入り
叉焼饅



大阪・なんば
蓬莱
TEL(641)0551—2

551

<出張店> なんば高島屋／虹のまち鹿鳴／心斎橋そごう／梅田阪神／天満橋松坂屋
京阪デパート／堂島地下センター／中之島サン・ストアー／なんば新川店／奈良近鉄百貨店

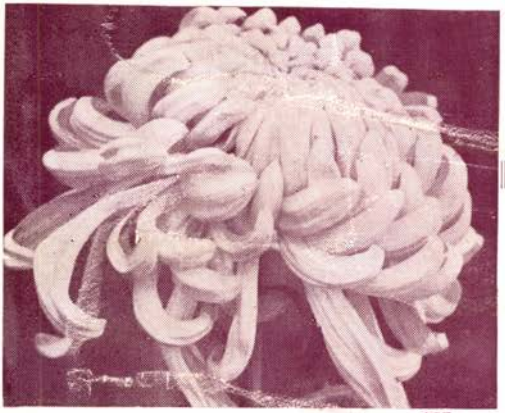
昭和四十一年一月九日　第三種郵便物認可
昭和四十九年十二月二十五日　印刷
昭和五十年一月一日　発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年　通巻五七二号
川柳塔　一月号
定価　三百円（送料十六円）

美の殿堂
大和文華館

平城京をめぐる山々を一望の
静かな環境にある大和文華館
は　日本建築の特色に近代美
を生かした美術の殿堂です
収蔵品も日本・中国を中心に
国宝・重要文化財を含む　有
数のコレクションです
観覧時間…10時～17時
▶近鉄奈良線　学園前駅すぐ

近鉄





一番よい酒
うまい酒

清酒
菊正宗

宮内庁御用達
菊正宗酒造株式会社
神戸・灘・御影